現代
實業國語讀本

八波則吉編

5

東京開成館藏版

375.9
Ya20
資料室

43384
教科書文庫
4
810
44-1924
20000
45716

教科書文庫
4
810
44-1924
2000045716

中央図書館
資料室
375.9
Y220

現代
實業國語讀本

八波則吉編

広島大学図書
2000045716

東京開成館藏版

僧正遍照（土佐光成筆）

現代實業國語讀本　卷五

目次

前編

一　創造の原理……一
二　スチブンソン（鐵道物語）……三
三　春の思出（詩）……薄田泣菫……三
四　美術の鑑賞……川路柳虹……三五
五　九牛の一毛……福澤諭吉……三
六　福澤先生……鎌田榮吉……三五

廣島大學圖書印
廣島大學教
45716
圖書

七　錦の直垂……（源平盛衰記）……四五
八　實盛（詩）……四八
九　睡蓮（候文）……五十嵐　力……五二
一〇　花物語……吉村冬彦……五七
一　芭蕉の花……五八
二　棟の花……六〇
一一　一喜一憂……六四
一　海の喜……六五
二　病院生活……七二
一二　産業の獨立……平田東助……七九
一三　實業家と精神修養……井上哲次郎……八三
一四　仁和寺の僧……吉田兼好……九一

一五　秋（詩）……野口米次郎……九五
一六　田園都市……（田園都市）……九八
一七　田園の縱走（詩）……白鳥省吾……一〇一
一八　第一義……村井知至……一〇四
一九　世界の歌枕……上田敏……一〇八
二〇　海運業の消長と國家の盛衰……（歐洲再航錄）……一一九

中編

一　金言（一）……一二七
二　金言（二）……一二八
三　金言（三）……一三〇
四　金言（四）……一三一

五　實語教（一）……一三二
六　實語教（二）……一三三
七　五條誓文……一三四
八　題壁……釋月性……一三五
九　示諸生……廣瀨淡窓……一三五
一〇　偶成……朱熹……一三六
一一　東照公幼時……中村和……一三六
一二　保己一講書……重野安繹……一三七
一三　孟母斷機……（蒙求）……一三八
一四　陶侃運甓……一三八
一五　格言……（孝經）……一三九
一六　九月十日……菅原道眞……一三九

一七　大楠公……梁川星巖……一四〇
一八　義家學兵法……賴襄……一四〇
一九　函人……中村和……一四一

後編

一　獨立の法……福澤諭吉……一四三
二　黑偉人……ブッカーワシントン……一四六
一　遊學……一四六
二　成業……一五三
三　一夜の神輿……一五九
四　五重の塔……幸田露伴……一六四
五　自警八則……一六八

六　峠越……里見弴……一七四
七　春の日（和歌）……一七九

東京大學圖書之印

現代實業國語讀本　卷五

前編

一　創造の原理

人生の目的は＋A（プラスアルハ）である。これは私の持論であります。先づ之が簡單な説明から始めます。

そも〳〵我々は生を此の世に享けた以上は、生れ甲斐のある生活を營まなければなりません。何をか生れ甲斐のある生活といふ。曰く、我々が此の世に生れて來た爲に、人

類社會に何程かの寄與・貢獻をなすに相違ないといふ自覺のある生活を指して、生れ甲斐のある生活と申します。換言すれば、若し我々が此の世に生れて來なかつたら、人類の文化は、其の進歩・發展の過程に於て、何程かの遲延又は缺損を生じたであらうと信ずるに足る生活を指して生れ甲斐のある生活と申します。卽ち消極的にいへば文化に對する寄與・貢獻、これが量をAといふ符徵で示せば、人生の目的は既存の文化にAを增加することであります。之を等式で書けば、

人生の目的＝既存の文化＋A

となります。之を略すれば、

人生の目的＝＋A

となります。是が私の持論であります。故に、Aの量が零又は零に近いものであれば、其の人は生れ甲斐のない生活を營んだ人、卽ち所謂醉生夢死した人間であります。で、出來る限りAの量を大きくしたいといふのが私の理想であります。

おぎやあと一聲泣くか泣かずに死んだ嬰兒でさへ、親に慈悲心を敎へ、近親に同情心を起させる。依つて該嬰兒の靈魂は不滅であると說く學者もあります。此の意味から申せば、我々が苟も五十年なり六十年なり此の世に生を保持する以上は、大なり小なり、若干のAを人類の文化に寄與

貢獻し得る筈です。故に、問題は、願はくはAの量を大きくして、出來得べくんば、未來永劫其の痕迹を文化史上に留めたいが、さて如何にすれば此の理想を實現することが出來るかといふことになります。

Aの量を大きくするには、個性を擴充しなければなりません。個性は天性と習性から成立つてゐます。天性は遺傳的氣質で、持つて生れた根性です。世には往々此の天性を個性と誤解して居る人がありますが、天性と習性――後天的に教育又は經驗に依つて習得する第二の天性――との和が、眞の個性であります。我々は此の眞の個性を擴大し充實させて、出來る限りAの量を大きくするやうに心掛

けなければなりません。

然らば、如何にして個性を擴充するか。

遺傳は個性の基調です。如何なる教育・經驗も、遺傳の影響を受けない譯には參りません。而も體質上の遺傳、例へば背が高いとか低いとか、眼が大きいとか小さいとか、此等體質上の遺傳が、其の人の一生を通じて殆ど手の着け方がないやうに、精神上の遺傳卽ち持つて生れた根性も、容易に之を矯正することが出來ないほど頑固な不變性と持續性を有するものであります。個性を天性と同一視する誤解は、實に此處に起因するのでありますが、併し、天性に變化を與へることの出來るものは卽ち教育及び經驗の力であり

ます。

教育には家庭教育・學校教育・社會教育等の種類がありますが、要するに、先輩者が後輩者に與へる指導・訓練の謂であります。之に對して、各自が讀書・旅行・交際・瞑想等に依つて自ら與へる教訓を經驗と名づけますれば、天性に多少の變化・改造を加へることの出來るものは教育及び經驗であります。故に、個性の擴充は一に教育及び經驗の堆積に待たなければなりません。

諸君、諸君は何たる幸運兒ぞ。生れて大正の聖代に會し、選ばれて中等學校の生徒となつて、日々進んだ程度の普通教育を受けてゐます。蓋し最も順當で理想的の學校教育

を受けて居る者と申すべきであります。而も一方には、講演部・雜誌部・劍道部・柔道部・野球部・庭球部・水泳部・山嶽部など、校友會の諸部で、各自自修的に心身上有益な經驗を重ね、以て諸君の個性を彌が上に擴充するの好機會を捉へてゐます。想ふに、諸君が他日世に出て、各自專門の事業に從事する時、諸君が人類の文化に寄與貢獻するAの量は、頗る驚嘆に値するであらうと信じられます。

さて、教育及び經驗の堆積に依つて十分に擴充された個性を發揮して、專門の事業に從事する時、其の事業に對する熱心卽ち愛が其の頂點に達する時、我々は圖らずも天來の啓示——インスピレーション Inspiration に感じて、玆に先人未發の眞

理を發見することがあります。是が卽ち創造です。何物かを精神上または物質上に創造するに至つて、人生の目的たる＋Aの量は其の極度に達すると謂ふべきであります。我々は理想として是非個性の發揮を創造の域に達しさせて、Aの影響を未來永劫人類社會の文化史上に留めたいものであります。

世には創造を偶然の産物でもあるかのやうに誤解して居る人がありますが、是はインスピレーションを文字通り天來の啓示卽ち外來の勢力であると見做すが爲であつて、其の實は、發明家の心理狀態が高潮に達した刹那、潛在意識が忽然顯在意識となつて現れたものであります。或人

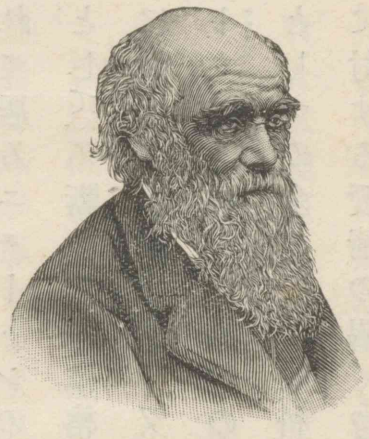
ニュートン
英國の數學者物理學者（1642—1727）

ダーウィン
英國の博物學者、進化論の鼻祖（1809—1882）

がニュートン Newton に發明の祕訣を尋ねましたら「不斷の努力である。」と答へたさうであります。林檎の落下を見て偶然引力の理を悟つたと傳へられて居るニュートンの言として「不斷の努力」は格別に妙味があります。又ダーウィン Darwin は嘗て「科學の人としての余の成功は、科學に對する愛情の賜である。」と言ひました。如何なる問題に就いても、之を省察する際の彼の無限の忍耐力！是が愛の力でなくて抑何でありま

林檎の落ちるのを見てゐるニュートン

せう。寐ても覺めても、「常にそれを考へてゐた」ダーウィンの熱愛が、何時かインスピレーションとなつて、進化論といふあの偉大な創造的産物を出したのであります。故に、私は斷言します、「創造の原理は「不斷の努力」であり、又「愛の力」である。」と。



ダーウィン

以下、聊か婆言を附します。

我が國が日本の日本から東洋の日本となり、更に進んで世界の日本となつて、五大國の一に列するに至つた今日の文化は、一體誰のお蔭でせう。問はずして知る、上は列聖の御稜威と、下は我等の祖先・先輩者の苦心・經營の結果であります。我が國の地位を斯うまで高くし、我々の肩幅を斯うまで廣くしてくれたのは、我々の祖先と先輩者、少くとも現時の壯年者までのお蔭であつて、諸君自身は今日までの文化に對して何等の寄與・貢獻をなしてゐないのであります。而も人生の目的は＋Aであります。知らず、諸君は將來果して如何なるアルハを我が文化史上にプラスしようとするのでありますか。

大器は晩成します。諸君の天才的天性に加へるのに、此處幾年間の學生時代に於ける教育及び經驗の堆積に依つて、十二分に諸君の個性を擴充し、以て他日震天動地の大發明・大發見・大創作を爲すの素地を作られるやうに、私は衷心

切望に堪へないのであります。

二　スチブンソン

英國ノーサンバーランド州(Northumberland)の首府ニューカッスル(Newcastle)市附近は、同國有數の石炭の産地である。此の市から程近いウィラム(Wylam)と稱する村に、一七八一年六月九日、今日吾人が鐵道の父と仰ぐジョージ・スチブンソン(George Stephenson)は産聲を揚げたのである。彼の父は此の附近の炭山に勤務する貧しい一火夫で、生活費にも窮する程であるから、無論その子のジョージにも教育を受けさせる餘力はなかつた。それ故、ジョージは幼少の頃から、牛を曳いて毎日のやうに牧場に出掛けて行

つた。

其の牧場の傍の堤の上を、炭山とタイン河との間を通ふ鐵道馬車が絶えず往來してゐた。生來發明の才に富み、緻密な頭脳の持主であつた彼は、當時人々の噂する機關車といふものを此等の車を走らして見たらよいだらうと、早くから感じてゐたので、頭脳に描いた理想的機關車を粘土で造つては喜んでゐた。長じて十四歳に達した時、彼は始めて父と同じくウィラム炭山に火夫として一日一志(シリング Shilling)の賃銀で雇は

スチブンソン

れることになつたが、是實に彼の天才發露の端緒であつた。

彼は自分の希望する生活に入ることが出來たので、其の喜は譬へやうもなく、朝は夙くから、夜は他の人々が家に歸つた後も、遲くまで孜々として好きな仕事に從事してゐた。其の熱心さは終に坑主に認められ、十七歳の時、機械技手に昇進した。彼は日々油や石炭の粉末で眞黑に塗れながら、機械の分解や洗滌を怠らず、其の間に專ら機械の構造を熟知することに努めた。偶〻或人から蒸氣機關に關する書物を貰つたが、彼はまだ其の書物に記してある重要な事柄を咀嚼するだけの學力がなかつたので、熟心に學問を勉强しようと思ひ立つた。何分晝間は寸暇もない繁忙な大責任のある仕事を受持つて居る身であるから、只終日の勞を醫すべき夜間だけ、牧師などに就いてひたすら學問を勵んだ。

或時、キリングウォースといふ炭山で、水揚喞筒を購入したが、据付方が不完全であつた爲か、所要の能率を發揮させることが出來なかつた。然るに、スチブンソンは五日間で之を見事に完成し、炭坑内の水を容易に排出させた。そこで、坑主は直ちに彼を一週間二磅（ポンド Pound）の給料で機關師として採用した。時は一八一〇年であつた。

さて、彼は此の炭山に雇はれてから、幾分か以前よりは餘暇を得ることが出來たので、物理・化學・機械・製圖などの學問を研究した。かくて此の炭山に勤務すること二年、坑主は

彼の勤勉を賞して、鑛山技師に昇進させた。

當時、坑内で採掘された石炭は、人力又は馬力によつて、港又は都市へ運搬されてゐたのであるが、かゝる幼稚な方法では、早晩輸送力に不足を來すに相違ないと洞察した彼は、肝膽を碎いて、僅々十箇月間に一臺の機關車を造り上げた。此の機關車は、最初の中は餘り好成績でなかつたが、彼の熱心は常に萬難を排し、不備の點には新たな改良を施して、一歩一歩新しい發明の基を築いて行つた。一八一四年七月二十五日、公試運轉を行つた所、五十分一の勾配の坂路に於て、八輛から成る、全重量三十噸の列車を牽引して、毎時四哩の速力で駛走し、豫定以上の好成績を擧げた。

當時ストックトン・ダーリントン（Stockton Darlington）の二市は、運輸はすべて小河の舟運に依つてゐたが、其の力が微々たるものであつたので、北部の炭坑地方は多大の不便を感じてゐた。そこで、種々協議の結果、鐵道を敷設することに決定した。さて、一八二一年、ストックトン市からダーリントン市に至る延長二十五哩の鐵道が敷設許可となり、翌々

スチブンソンが始めて運轉した汽車

年、スチブンソンは三百磅の俸給で此の新鐵道會社の一等機關師に雇はれ、同時に、動力としては彼の機關車を採用する契約が結ばれた。そこで、彼は既にニューカッスル市に設立されてゐた彼の機關車工場で、獨得の技能を揮つて機關車の製造に着手し、一八二五年に愈出來上つた。それが卽ちロコモーション(Locomotion)號と命名された有名な機關車である。

さて、同年九月、盛大な開通式が擧行された。此の日、スチブンソンは自ら此のロコモーション號に乘じて運轉を司り、其の後部に、石炭や雜貨などを積んだ貨車と、鐵道會社社長及び其の他の關係者一行の乘込んで居る客車と、外に各種の車輛都合六輛、此の全量凡そ九十噸の列車を牽引して、

毎時約十哩の速力でダーリントン市を發車した。

最初から彼を狂人視して、必然汽罐が爆發するだらうと信じてゐた多數の人々は、此の有樣を目擊して、一方ならず驚愕した。是に於て、彼の名聲は四方に喧傳し、此の新しい交通機關に對して、今まで一般の人々に懷かれてゐた疑惑は一掃されて了つた。斯くて機關車は全く實用的のものであることが實證されたので、豫て企圖されてゐたリヴァプール(Liverpool)市とマンチェスター(Manchester)市との間の鐵道敷設は、スチブンソンに委任された。彼の名聲は最早飛ぶ鳥さへも落すばかりになつた。

リヴァプール市はアイリッシュ(Irish)海に面する要港で、マン

チェスター市の門戸をなし、既に十八世紀に於て、棉花の産地たる北米合衆國と、紡績業の盛大なるマンチェスター市との仲介者たる地位にあつた。此の兩市は夙に二條の運河によつて連絡され、貨物の運搬は主として此の水運の便によつてゐた。然るに、水運の便は當時甚だ不秩序なもので、例へば、リヴァプール市から北米へは廿一日もあれば優に達しられたのに、此の兩市間の貨物運搬は、往々六週間といふ多くの日數を要した。それぱかりでなく、其の運賃も亦頗る高かつた。かゝる狀態であるから、荷主間には、從來屢協同して馬車鐵道を敷設しようと議せられてゐた。それが今度は意外に急速な進捗を見て、具體的な鐵道敷設案

ナポレオン　佛國の皇帝（1769—1821）

ワーテルロー　ベルギーの一村落、ブリュッセルの南十一哩

ウェリントン　イギリスの將軍（1769—1852）

が出來上つた。

是に於てか、同社は直ちに客車・貨車など一切の車輛の製造方をスチブンソンに託した結果、翌一八三〇年九月十五日、盛大な開通式が擧行された。此の開通式當日の主な來賓には、過ぐる十五年の昔、當時歐洲の山河を蹂躙したナポレオン（Napoleon）の大軍をワーテルロー（Waterloo）に邀へて、遂に致命的大敗を與へ、再び起つことの出來ないやうにした英軍の名將ウェリントン（Wellington）公、其の他多數の高官があつた。公は其の當時內閣總理大臣の職にあつたのである。

ウェリントン

さて、スチブンソンは自ら公の一行が乘つて居る列車を牽く機關車を操縱し、又その子ロバートスチブンソンは其の他の來賓の一團が乘込んで居る列車の機關車の運轉を司り、尙他に都合五列車揃へて、古今未曾有の汽車行列は、マンチェスター市を指してリヴァプール市を搖ぎ出で、途上二十哩の速度を保ちながら進み、玆に目出たく此の式は終つた。　爾來、兩市間の迂遠な舟運及び驛馬車などは全く廢滅に歸して了ひ、交通上に一新紀元を劃するに至つた。

Robert Stephenson

スチブンソンは晩年に至るまで尙熱心に鐵道事業に心血を注ぎ、屢歐洲諸國の招聘に應じて大陸に渡り、又其の子ロバートスチブンソンも父の偉業を助けて、共に鐵道の進

薄田泣菫　名は淳介、岡山縣の人、明治十年生、大阪毎日新聞記者

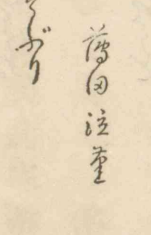
歩・發達に盡す所が多かつた。　父のスチブンソンは、一八四八年八月十二日、テプトン・ルースの別莊で遂に他界の人となつたが、彼の隆々たる名聲は、永久に不朽であるばかりでなく、其の偉業は年と共に只々驚嘆を增すばかりである。

Tapton House

さて、マンチェスター・リヴァプールの二市を結ぶ些々たる鐵道敷設後、僅に八九十年になるかならぬ中に、今では鐵路が全世界を蜘蛛の巢のやうに縱橫に包んで、其の延長實に六十四萬哩を超過する有樣である。（鐵道物語）

三　春の思出

春の秋を都小夏を



薄田泣菫

宮津由良
京都府

切戸
京都府與謝郡吉津村の智恩寺を切戸の文殊といふ

新しきは撥をどりて
幾夜ぬまどのありに
杉戸や切戸まうでや
物づくる欠伸おりた
後ゆくか後への方ふ
ほうなる都ひときり
烟ひきたひぐらしたれぞ
月後ちて雲の移りた

宮津のり中とへ急ぎぬ
京むまあ雑度あるうど
人のきれ松の道づ花
眺り目ひとろむとすれば
ちりかふの上ふ芝や
鈴あたの少れきらぬ
条ふはふみだらぼ仏
蒼ふは中とに来者ぬ

川路柳虹
名は誠、東京市の人、明治二十一年生、詩人

まちうぶは生ぬりて
ふの後や歳ふ経ちん
ゆびてはえうえ立ぬ
地の子今行ふにあらん
人よりうよはうて

あひづみちにあ小ぬ
お月の光は夢に照ふ
中とに夜の上ふ芝よ
黒の塔ふかたうみ
少ちうはふ海ぞ蒼き

（三十五歳）

四　美術の鑑賞

川路柳虹

總べて美術といふものは何に限らず、味ふことによつて價値が出て來るものです。どんな作品にせよ、美術家が精

神を籠めて作つたものである以上、之を觀る人は、其の苦心の跡を考へることが必要です。作品が決して偶然に出來るものでない以上、其の作品はどういふ風にして出來たかを考へ、そして、之を觀て自分はどう感じたかといふことを思つて見るのが、美術を味ふことです。此の「味ふ」ことを鑑賞と申します。畢竟、繪でも彫刻でも、之を作つた人は、自然に就いて感じたことをそれに表したのですから、其の表したものは、卽ち作者自身の考や物の見方の態度を示したものであると言へます。それ故、一の美術品を味ふことは、單に作品を味ふことでなく、其の作品を作つた作家の精神を味ふことになります。同じ林檎の繪でも、甲の人の畫いたものと、乙の人の畫いたものとでは、色も形も總べて相違してゐます。それは何故かと言ふに、作者がそれ〴〵自分自身の個性によつて、同じ色でも、甲は之を強く表し、乙は非常に弱い調子で表すといふ風に、其の作者の心持や感じが異なるからで、其の異なる所に個性の差が生ずるのです。美術上の作品は作者の異なる個性を表すから面白いのです。美術家は一般の人が何の注意も拂はない所に非常な注意を拂ひ、人の氣付かない所に美を發見します。一般の人でも、夕日の美しさは漠然と知つてはゐませう。併し、其の夕日が樹の間を洩れる微妙な光だとか影だとかに對して、どれだけ深く注意するかといふことは疑問です。併し、美術

家は自然のさういふ微細な點にまでも常に注意してゐますから、其處から、人の常に看過して居るものに對して、非常に美しいものを發見して來るのです。ですから、繪や彫刻を見るといふことは、一面には、さういふ自然に對して我々の看過してゐる美を、美術家によつて教へられるといふことになります。美術品を味ふことは、其の味ふことによつて、常には何でもなく見えてゐた自然が、斯うも美しいものであるかといふことを本當に知る所にあります。

私は能く、「私には美術は解らない。」とか、「何處が善いのか惡いのか見當が付かない。」とか云ふことを聞きます。此の「解る」といふことは、無論其の作品を理解することを意味しますが、併し、美術品を理解するには、科學などを理解するやうに、たゞ理窟にだけ依つてはいけません。勿論理智も必要ではありますが、美術品は理窟によつて解する以外に、「感じる」ことが必要です。それ故、美術の鑑賞には、「どういふ風に理解したか。」といふことよりも、「どういふ風に感じたか。」といふことが肝腎です。何となれば、美術品はやはり人の感情に訴へるもので、何よりも人を感動させるものですから、之を觀て何等の感じも起らないといふなら、それは其の作品が美術品としての資格を備へてゐないか、或は之を觀る人が感情に乏しいかに因るのです。こゝに感情といふのは、悲しいとか嬉しいとかいふことを意味する感情ではなく、

むづかしく言へば感性といふべきもの、卽ち感じる心のあることを云ふのです。感性がなければ、本當に美術品を鑑賞することは出來ません。結局、美術を味ふといふことは、自分の氣持を以て其の作品を觀ることです。

それでは、如何にすればさういふ風に自分の感情で美術品を理解することが出來るかといふに、それには、先づ虛心平氣で作品を觀ること、何度も〳〵之を熟視すること、其の技巧を知ること、此等の條件が必要です。作品を味ふ爲には、徒に他人の噂や評判などに動かされないで、自分でどれを好むかといふことを考へるべきです。其の爲には、先づ作品の前に立ち、邪念を去つて、作品と自分とだけが相對し、

それを何度も〳〵熟視して居ることです。其の內に色々のことが解つて來ます。さて、そこから一般の技巧卽ち作品の技術を見るのです。巧であるとか拙いとかいふことは、要するに比較ですから、澤山の作品を見た上でなければ解りません。澤山の作品を熟視することは、美術の鑑賞上最も必要です。そして、次には其の作品がどういふ風にして出來て居るかといふ技巧を知ることが必要です。これは多少美術上の常識を學ばなければなりませんが、それは急に一時に知る譯には行きません。樂譜に關する根本の常識に缺けてゐては、折角音樂を聽いても解らぬやうに、能く美術品を理解するには、矢張一通り技術に關する常識を

有する必要があります。油繪と水彩畫との差、繪具の名前、それから、調子とか色とか筆觸とか樣式とかいふやうなことも、其の意味ぐらゐは心得てゐなければなりません。

五　九牛の一毛

福澤諭吉
大分縣の人、明治の先覺者、明治三十四年歿、年六十八

大海の一滴、九牛の一毛とは、人の常に言ふ所なるが、一滴の水は大海を增減するに足らず、九牛の一毛は物の數にもあらずとの意ならん。なれども、思想を緻密にして考ふれば、假令一滴・一毛たりとも、決してこれを等閑に附すべからず。足を以て大地を蹈めば、多少の震動を生じて、周圍にある家屋・木石を始め、一切の物皆その震動の餘波を被らざるなし。有形の物も無形の事も、理に於て異なることあるべからざれば、人間の言行を愼むべきは勿論、その一言一行、假令譯もなき戯にても、無頓着にこれを爲すべからず。一言他人の機密を漏したるため、其の人の利益を妨げ、甚しきは家を亡し身を殺すの禍に陷れし例、古今に多し。此等は著しく世人の耳目に觸るゝ所なれども、人の見ざる所聞かざる所に、禍福の本を釀したりしことは如何ばかりなりしか。滔々たる天下、今日も釀しつゝあることならん。一寸人に溫言を以て忠告を試みしに、其の人恰も身の方向に迷ふ最中とて、此の忠言を聞いて進退を決し、遂に生涯を安くして、餘慶を子孫に遺し、幾百年の久しき、幾百千人の多き、皆其の

餘德を被ることもあれば、其の反對に、人を容るゝ度量なく、己の意に適ふ者を愛し、逆らふ者を憎み、愛憎常なく、爲に間違を生じ、其の間違は更に又第二の間違を引出し、遂に容易ならざる大事に至ることもあり。愛憎は個人の間の私なれども、永年の後に、其の禍の波及する所則ち廣大なり。主人の一笑能く家人を悅ばしめ、妻女の一顰能く良人の心を痛ましめ、長老の一言は後進生の方向を左右し、少年の一擧動は其の智愚を斷ずる測量器となり、一席の不愉快よりして生涯の交際を誤り、一物の得喪の爲に人品の高卑を表白するが如きは、人間世界の常態にして、其の幸不幸は單に當局一人に止らず、永遠に延いて、天下後世幸不幸の泉源たるべし。言行一發千歲不滅と云ふも可なり。されば、我々が家に居り世に處するには、一言一行・一笑一顰も等閑にせずして謹愼すべきは無論なれども、人事の繁多なる、時々刻々其の事に當りて、故らに愼み故らに注意せんとすとも、實際に叶はざるのみか、却りて窮屈にして不自由を感じ、遂には不活潑の境遇に陷るべければ、年若き時より獨り自ら精神を鍛錬し、萬事萬物を迂濶に看過せずして、思想の緻密を養ひ、習慣漸く第二の性と成り、知らず識らずの際に言行の美を致すべきなり。

鎌田榮吉
和歌山縣の人
安政四年生、
貴族院議員

六　福澤先生

鎌田榮吉

福澤先生は其の一生を通じて、常に金錢の必要を說かれた。「何をするにも金がなくては。」といふ言葉は、始終先生の口から出た。それが爲に、先生自身が非常に金の好きな人であつたかのやうに誤解して居る者がある。甚しきは、先生が朝廷から授爵の御内沙汰のあつた時それを頂戴されたのを拜辭され、次いで御下賜金のあつた時にそれを頂戴されたのを見て、是卽ち先生が金錢を愛する實證であるといふ者さへあつた。實に先生の心事を解しないのも甚しいと言はなければならぬ。

さういふ世間の取沙汰を聞く度に、私は其の御下賜金のあつた當時を思ひ出すのである。其の頃、私は學校の用事

小幡名は篤次郎、大分縣の人、福澤諭吉の門弟、慶應義塾長、明治三十八年歿、年六十四

で地方へ出張してゐた。歸京すると、先生の宅から使が來たので、すぐに行つて見ると、先生は、「今朝ほど、宮内省からお召があつたが、私は病中で行かれないので、小幡さんに代理として行つて貰つた。」との話である。待つ間程なく、小幡さんは金五萬圓御下賜の御沙汰を拜し、中央銀行の小切手に水引の掛つたのを頂戴して歸つて來られた。御沙汰書には、「夙に西洋の文明を輸入し、著述に、教育に、世を益すること多し。」といふ意味の御言葉があつて、勿論一個人としての福澤先生に下し賜はつたのである。先生は幾度かそれを拜し戴いて、聖恩の忝さに感泣された後、直ちにそれを私の前に出されて、「これは自分の頂戴して置くべきものではない。

慶應義塾へ寄附するから、何卒然るべくお取計を願ふ。」と言はれた。それから、家族を呼んで優渥な聖旨を傳へられた上、「私は此のお金は福澤の家で使はうとは思はぬ。家は別に生計に不自由がないから、鎌田さんに賴んで、學校のことに使つて貰ふことにした。」と語られた。固より家族中誰一人異議を唱へる者はないので、御下賜金は其の儘學校へ寄附されることになつたが、其の時の森嚴な光景は、先生の高潔な心事が宛ら浮び出て居るやうに感じられて、永久に忘れることが出來ない。

鎌田榮吉

私は先生に對する紛々たる俗評を一掃するに足る權威が、此の一事に十分存して居ると思ふ。

先生の敎は總べて獨立自尊といふ根本精神から出てゐたのである。孟子に「恒産なし、因りて恒心なし。」といふ語があるが、先生が金錢の必要を說かれたのは、あらゆる人をして、其の恒心を養はせる爲に外ならなかつたのである。英國の學士院では、會員を選ぶのに、品行・學問及び財産の三つを其の要件として居るが、是は財産のない者は、動もすれば、其の節操を汚す虞がないでもないからである。

先生が日本人民に希望された所も、やはり此の三要件を具備させたいといふことであつた。先生は之を個人に對

してばかりでなく國家に對しても希望され、一國の體面は富に依つて保たれるといふ見地から、盛に實業を奬勵された。今までは士農工商といつて來たが、今後は農工商士と呼ばなければならないなどとも言はれた。要するに、國としても、個人としても、餘り貧乏では其の獨立を保つことが困難であるといふのが、先生の根本的意見であつたのである。其の偉大な精神を知らないで、福翁が實利主義を說いたので、世道人心の腐敗を來したなどと言ふ者があるのは、實に笑ふべき短見と言はなければならぬ。

私はよく誰にも話すことであるが、先生は丁度ぶんまはしのやうな人であつたと思ふ。コンパス（Compass）には二本の脚があつて、其の內脚は一定の處に固着して動かないが、外脚は伸縮自在である。先生の主義や見識は、恰もコンパスの內脚のやうに、一定して動かないが、其の說き方は、コンパスの外脚のやうに、時機により、場所により、又相手によつて、どんなにでも變化して行く。其の內脚の方だけを見る者は、先生の說は固定して移ることを知らないと言ひ、其の外脚の方だけを見る者は、猫の眼のやうに始終變つてばかり居ると言ふが、雙方共に先生の一面ばかり見て、全體の偉大な精神を見ることが出來ぬのは愚の至りである。卽ち先生は一脚を固着させながら、他の一脚を自由自在に伸縮廻轉させて居られたのである。西洋文明の輸入といふことは、丁

度コンパスの內脚のやうに、先生に於ては一定不動の意見であつたが、併し、其の輸入の仕方や奬勵の方法に就いては、先生の說は時代に應じて常に變つて行つた。一例を擧げると、國民の間に排外思想が橫溢して居る時には、先生は口を極めて西洋の文明を稱讚し、之を日本へ移植することに力められたが、其の反動として、國民が西洋の文明に心醉し、其の皮相の模倣に汲々として居る時には、先生は冷靜の態度に歸つて、祖先傳來の國民的精神の尊重すべき所以を敎へられた。之と同じく、獨立自尊といふことも、先生に於ては一定不動の意見で、當時に於ては、まだ實業が發達せず、士族遊食の餘風が尙一般國民の間に殘つてゐたため、先生は聲を大にして金錢の必要を說き勸められたのである。若し今日のやうな金權跋扈の甚しい狀態を目擊されたならば、先生の金錢に對する議論も餘程變つて來てゐたに相違ないと思ふ。

是は先生の古い頃の門弟から聞いた話であるが、維新以前、尊王攘夷論の甚だ喧しかつた頃、先生は盛に西洋の文明を露骨に紹介されたため固陋な攘夷家から國賊を以て目され、危害の其の身に及ばうとすることがあつた。門弟等は此の形勢を見て、時節柄餘り大膽な議論をなされては不穩であるから、少しく鋒鋒をお收め下さるやうにと諫言した。所が、先生は厚く其の好意を謝した上、今になつては、ど

うしても止めることが出來ない。假令殺されても、自分の志の爲ならば遺憾なことはない。是は私の道樂であるから、何卒止めずにやらせてくれ。」と言つて、相變らず平生の主張を續けられたといふことである。其の時代の人心として、大抵の者ならば、君の爲とか國の爲とかいふべき所であるが、先生はさやうなことは一語も言はず、唯輕く「私の道樂であるから。」と言はれた。其處に先生の面目が最もよく現れて居ると思ふ。其の實、先生の胸中君國に對する至誠が炎々として燃立つてゐたことは、言を俟たないで明かであつた。（進取論）

實盛　齋藤氏、通稱別當、壽永二年（一七四三）歿、年七十三

内大臣　平宗盛

蒲原　駿河國

利仁　左大臣藤原魚名六世の孫、延喜中鎭守府將軍に任ぜられた

七　錦の直垂

そも〳〵實盛、石打の征矢を負ひ、錦の鎧直垂を着たることは、今度北國へ下りける時、内大臣に申しけるは、「實盛東國の討手に下向して、矢一つも射ず、蒲原より歸り上りしこと、老の恥と存じ候ひき。今度北陸道に罷下りなば、年闌け身衰へて侍れども、眞先蒐けて討死勿論なり。實盛所領に付きて近年武藏に居住なれども、元は越前の國の住人にて、北國は舊里なり。先祖利仁將軍三人の男を生む。嫡男越前にあり、齋藤といふ。次男加賀にあり、富樫といふ。三男越中にあり、井口といふ。彼等子孫繁昌して、國中互に相親しむ。されば、三箇國の宗徒の者共、内戚・外戚について親類一

故郷
富貴不歸故郷如衣錦夜行（漢書）

菊池容齋
名は武保、東京の人、畫家、明治十一年歿年九十一

齋藤實盛（菊池容齋筆）

門ならざる者なし。實盛討死して候はば、當國・他國の者共集つて、『別當は何をか着たる、如何なる裝束をかしたる。』と、見沙汰せんこと恥し。故郷へは錦の袴を着て歸るといふことに侍れば、今度生國の下向に、錦の直垂に石打の征矢御免を蒙り候はん。且は最後の御恩なり。」

と所望申しければ、初は免し給はざりけるが、既に打立つ所に、實盛思ひ切つたる顔の氣色、且は哀れに思ひ、且は軍を勸めんが爲に、内大臣の我が料として祕藏せられたりけるを取出して下し賜へり。實盛畏り賜はつて、千秋萬歳の心地してぞ着たりける。之を聞きける大名・小名、袖を絞らぬはなかりけり。

朱買臣
字は翁子、吳の人

昔、大國に朱買臣といふ人ありき。家貧しうして、始めて書を讀みければ、其の才身に餘りつゝ、漢武帝に召されて、侍中といふ官にゐて、大いに榮え富みければ、住馴れし會稽の故郷へ下りしに、錦の袴を着たりけり。見る人文德の空しからざることを思へり。實盛も此のことを思ひけるにや、最後の所望も哀れなり、免し給ふも情あり。彼は文を以て着し、此は武を以て賜はる、文武の勸賞とり〳〵なり。（源平盛衰記）

八　實盛

篠原　加賀國
木曾殿　源義仲
光盛　手塚太郎

さるほどに
篠原の軍はてしかば
木曾殿の御前に
手塚の太郎進み出で
申すやう
「光盛こそ奇異の癖者の首討ちて候へ
大將かと見れば續く勢なし
侍かと見れば錦の直垂を着たり
名乘れと申せど遂に名乘らず
坂東聲にて候ひき」

樋口　次郎兼光

木曾殿しばし打案じ
「あはれ齋藤別當か
さはれ實盛ならんには
鬢髮ともに白かりなんを
黑きこそ不審なれ
樋口召せ」とて召されけり
樋口の次郎一目見て
「あなむざん實盛にこそ」と落涙す
「鬢髮の黑きは如何に」
「さればこそ」
兼光やをら涙を抑へ

「されば こそ思ひ出で侍れ
寶盛かねぐ〳〵申しし
『澤に生ふる若菜ならねど徒に
年をつむにも袖は濡れけり
澤に生ふる　藤原俊成、新古今集
悲しきものは老の白髪
六十に餘り軍せんには
せめては鬢髪墨に染め
若やぎ討死すべきぞ』と
申しし言葉につゆ違はず
誠に染めて候よ
いで洗はせて御覽候へ」

申しも果てず首を持ち
ほとりの池に立寄りつ
鏡なす
水も綠の影うつる
柳の絲の枝を垂れ
氣霽風梳新柳髮
氷消波洗舊苔鬚
氣霽云々　都良香、和漢朗詠集
鬢を洗ひ髮を洗へば
烏羽玉の
墨は流れて
七十の波額にたゝむ

白髮の尉とぞなりにける

五十嵐力

九　睡蓮

五十嵐力
米澤市の人、明治七年生、文章家、早稻田大學教授

此の春、或友達より睡蓮の珍種を貰ひ受けて、徑一尺五寸ばかりなる素燒の鉢に植ゑ置き候處、日を追うて發育し、昨今は日毎に一輪乃至三四輪の優しき花を見せ居り候。烈日かん〳〵と照渡りて、なべての草木の打萎れ居り候折に、此の花の獨り涼しき笑の眉を開きたるを見候は、其のすが〳〵しさ何に譬へ候はん。

睡蓮を育つる興味は、最初の一葉の水に浮ぶ時に始り候。只見る、一塊の泥土、誰か此の裏に目を新にする百千の花葉を藏することに想ひ及び候べき。春暖の加はると共に、此の泥土に生の蠢きの見え初めて、頓て其の間より蝸牛の角の如き數條の芽生じ候。其の芽長ずるに隨ひて、尖頭の部分稍太くなり、漸くにしてつぼめる葉の形を水面に現ずるや、忽ちぱちりと開けて、ぺたりと水上に浮び、盆の如く、海月の如く、朧夜の月影とも見るべく、小さき蛙の圓座とも稱すべく候。斯くて、今日一葉、明日二葉、五葉、八葉、圓盤の數日毎に加はりて、海中の連珠島の如く見ゆるが中に、頓て一本の花莖長く水面を抽いて、其の尖頭に彫刻の如き小蓮花を開き候。其の美しく品位ありて而も賴りなげに情あるらしき樣は、あたりに友もやあ

ると顧みるが如く、水面を高く離れたるを危むが如く、眩しき日に照し出されて己が美容を羞づるが如く、而して水上の光澤ある圓き葉は、空中の美花に對して競ひて鏡面を捧ぐるに似て、鉢の中の小天地の景致、麗しとも面白しとも申すも愚かに候。

一たび花を煮けたる後は、晴天なる限り、連日二三輪を

日比谷公園の睡蓮

見せざることなくして、十月の半ばに至り候。一年の三分の一を領して、而も常に鮮かなる姿を現すこと、百日紅（さるすべり）その他の命長き花の末葉の恥多き類にあらず候。一花の壽命は二日を常とし、朝八九時の交に開きて、午後の四時前後に閉ぢ候。閉ぢたる姿は小さき鰻の頭の如く、再び翌日の朝陽を迎へて開き、二日目の夕方に至り長へに閉ぢて、頓て力なき頭を水中に沒し候。終をよくする、亦此の花の一德と申すべきか。

茲に此の花に附屬して御耳に入るべき一話これあり候。小生初め睡蓮を植うる時、一緒に三つの鉢を求めて、草を植ゑ、石を置き、或は金魚を放ちなど致し候ひしが、他

の二つの鉢は、五日・七日を經れば薄濁りして、水面にどろどろの綿を浮べ候に、睡蓮の鉢のみは、日を經、月を越ゆれども、清明澄徹にして、少しも濁ることなく候。　小生始め家人等皆々不思議のことに思ひ候ひしが、よく〳〵取調べ候處、此は贈主の花友達が、嘗てアメリカ(America)より取寄せたる澄水草の根が、睡蓮の根に附着し來れるが爲にて候ひき。　此の草、細莖・狹葉、外觀の甚だ振はざる小草には候へども、一種特別なる化學的分解作用を有し、其の濁水を澄すカは世界第一と稱せられ候。　もとアメリカの何處やらの陰濕なる地方に在りしものなるが、ふと植物學者の目に止りて、廣く世界に恩澤を及ぼすに至りし由。　我が

浦の濱木綿　三熊野の浦の濱木綿もゝへなす心はもへどたゞに逢はぬかも（柿本人麿、萬葉集）

吉村冬彦　實名は寺田寅彦、高知縣の人、理學博士、東京帝國大學教授

臺灣に、嘗て濁水の滯れる濕地ありて、マラリヤ(Malaria)の流行地として名高かりしが、此の水草を植うるに及び、全く此の病の迹を絶ちたりと申し候。　造化は人の惡き施主の如く、一方に病苦を課すれば、必ず一方に之に應ずる藥を備へて、暫く之を隱し置き、人智を試みて後にこれを與へ候。世に不用なる物なく、物には必ず二重・三重・五重・百重の意義これあり候。　歌に、「浦の濱木綿の重なる如し。」と申し候へども、理趣の重疊層累せること、豈濱木綿に限り候はんや。　不一。

一〇　花物語

吉村冬彦

一　芭蕉の花

晴上つて急に暑くなつた。朝から手紙を一通書いたばかりで、何をする元氣もない。何遍も机の前へ坐つて見るが、ぢきに苦しくなつて、つい寢そべつてしまふ。時々涼しい風が來て、軒のガラス(Glass)の風鈴がなる。床の前には、幌蚊帳の中に、俊坊が顏を眞赤にして、枕を脫して俯きに寢て居る。縁側へ出て見ると、庭はもう半分蔭になつて、蔭と日向の境を、蟻がうろ〳〵して出入して居る。此の間、上田の家から貰つて來たダリヤ(Dahlia)は、どうしたものか、少し芽を出しかけた儘で、大きくならぬ。戸袋の前に大きな廣葉を伸した芭蕉の中の一株には、今年花が咲いた。大きな厚い花瓣が三つ

四つ開いたばかりで、到頭開き切らずに朽ちて了ふのか、もう少し萎びかゝつたやうである。蟻が二三匹たかつて居る。俊坊が急に泣出したから、覗いて見ると、蚊帳の中に坐つて、手足を投出して泣いて居る。勝手から妻が飛んで來る。坊は牛乳の罎を、投出した膝の上で、自分に抱へて、乳首から息もつかずごく〳〵飲む。涙でくしや〳〵になつた眼で、兩親の顏を等分に眺めながら飲んで居る。飲んで了ふと、又思ひ出したやうに泣出す。まだ眼が覺めきらぬと見える。妻は俊坊を負ぶつて縁側に立つ。「芭蕉の花、坊やりますよ。あの實は食べられないか知ら。」坊は泣止んで、芭蕉の花が咲きましたよ。それ、大きな花でせう。實が生

芭蕉の花を指して「もゝ〳〵」と言ふ。「芭蕉は花が咲くと、それきり枯れて了ふつて、御父ちやま本當？」「さうよ、だが人間は花が咲かないでも死んで了ふね。」と言つたら、妻は「まあ。」と言つたきり、背を搖ぶつて居る。坊が眞似をして「まあ。」と言ふ。二人で笑つたら、坊も一緒に笑つた。そして、又芭蕉の花を指して「もゝ〳〵。」と言つた。

二　棟の花

一夏、腦が惡くて、田舍の親類の厄介になつて、一月ぐらゐ遊んでゐた。家の前は清い小川が音を立てて流れて居る。狹い村道の向側は一面の青田で、向ふには德川時代以前の小さい城址の岡が見える。古風な屋根門のすぐ脇に、大きな棟（あぶち）の木が茂つた枝を擴げて、日盛りの道に涼しい蔭を作つてゐる。通りがかりの行商人などが、よく門前で荷を下し、門前の流で顏を洗うた濡手拭を口に啣へて涼んで居ることがある。一日、暑い盛りに門へ出たら、樹蔭で桶屋が釣瓶や桶の箍（たが）を嵌めてゐた。綺麗に掃いた道に、青竹の削り屑や鉋屑が散らばつて、棟の花がこぼれて居る。桶屋は黑い痘痕のある一癖ありさうな男である。手拭地の肌着から黑い胸毛を現して、逞しい腕に木槌を振うて居る。槌の音が向ふの岡に反響して、靜かな村里に響き渡る。稻田には强烈な日光が眩しいやうに射して、田圃は暑さに眠つて居るやうに見える。其處へ羅宇屋が一人來て、桶屋の側へ

荷を下す。古い、そして小さ過ぎて胸の合はない小倉の洋服に、腰から下は、股引脚絆で、素足に草鞋を穿いて居る。古い冬の中折を眉深に冠つて居るが頭は綺麗に剃つた坊主らしい。「今日も松魚が捕れたのう。」と、羅宇屋が話し掛ける。桶屋は「捕れたかい、此の頃はなんぼ捕れても、みんな蒸氣で上へ積出すから、こちらの口へははいらんわい。」と、やけに桶をぽん〳〵と叩く。門の屋根裏に巣をして居る燕が、田圃から歸つて來て又出て行くのを、羅宇屋は煙管を啣へて感心したやうに眺めてゐたが、「鳥でも燕ぐらゐ感心な鳥は先づないね。」と前置して、こんな話を始めた。村の或舊家に燕が昔から巣をくうてゐたが、一日、家の主人が燕に向つて、「お前

は永年うちで宿を借して居るが、時偶には土産の一つも持つて來たらどうだ。」と戯に言つたことがあつた。そしたら、翌年燕が歸つて來た時、丁度主人が飯を食つてゐた膳の上へ飛んで來て、小さな木の實を一粒落した。主人は何の氣なしにそれを庭へ投り出したら、間もなく其處から奇妙な樹が生えた。誰も見たこともなければ聞いたこともない不思議な木であつた。其の木が成長すると、枝も葉も一面に氣味の惡い毛蟲がついて、見るも淺ましいやうであつたので、主人は此の木を引拔いて、風呂の焚附に切つて了うた。其の時、丁度町の醫者が通りかゝつて、それは惜しいことをしたと歎息する。どうしてかと聞いて見ると、それは我が

邦では得難い麝香といふものであつたさうな。此處まで一人で饒舌つて了つて、尤もらしい顔をして煙を輪に吹く。ぽん〳〵と桶を叩きながら默つて聞いてゐた桶屋は、此の時、一寸自分の方を見て變な眼付をしたが、「そして、その麝香といふのは其の樹のことかい、それとも又毛蟲かい。」と聞く。「うゝん、そりやあ其の麝香にも亦色々種類があるさうでのう。」と、どちらとも分らぬことを言ふ。桶屋は強ひて聞かうともせぬ。桶を叩く音は向ふの岡に反響して、楝の花がほろほろこぼれる。（藪柑子集）

二　一喜一憂

一　海の喜

耳の邊で何かがさ〳〵と音がする。顏に厭な蠅がたかる。そつと眼を明けて見ると、蚊帳は疾うの昔に片隅に寄せてあつて、誰も寢てゐない。「兄さん、起きた、起きた。」と、弟達が洗面所から聲を揚げて居る。今日は海に連れて行く約束なんだ。一人で行くなら兎も角、子供達のお伴は恐縮だと思つたりする。外へ出る。夏の日は氣持よく照渡つて居る。朝飯を終ると、早速準備の催促を受ける。弟達は嬉しさうに、せつせと海水着・浮袋などを搔集めてバスケット（Basket）へ詰込んで居る。默つて其の手附を眺める。辨當や果物を入れながら、頭を擧げてにつこりする。

ペンキ　オランダ語 Pik.

夏目さん　名は金之助、號は漱石、東京市の人、文學者、東京朝日新聞社員、大正五年歿、年五十

準備が出來たので、重いバスケットを提げて、弟達の後からついて行く。今日に限つて彼等はさつさと歩いて居る。ともすれば早くお出でと催促を受けさうだ。

やつと驛へ着く。舊式な、ペンキの剝げかけた汽車が横付けになつた。人を突きのけ、子供達を押上げるやうにして乘込む。謙遜してゐたら、晩まで立ん坊だ。謙遜も時によりけりだと悟つたやうな顏をして、澄して外の方を向いて居る。切れ〴〵の汽笛が鳴つて、汽車はごと〳〵と動き出した。夏目さんのいはゆるマッチ箱を思ひ出す。時々強い光がぱつと眼を射る。田の水が反射して居るのだ。

目的地の驛に着く。今度は大人しく、人の後から徐々に

ついて出る。改札口で一列に並んで、心太式に後から押されながら吐出される。港をくるりと廻つて、漸く海水浴の休憩所に落着いた。

素裸に捻鉢卷で、さく〳〵と冷かな砂を踏みしめて行く。島が遠く而もはつきりと現れ出て居る。去年の夏の、あの島での味の好かつた魚を思ひ出す。ぢやぶ〳〵と徐々に這入る。少し冷たい。其の恰好が變だつたのか、後から笑聲と一緒にさつと水を打ちかけられたので、それを機會に思ひ切つて沈む。「よく氣をつけてお呉れ。」と言はれた母の言葉を嚴守して、金槌連を監視する。上の弟は少し泳げるが、まだ金槌の域を脱してゐない。それでゐて本人は甚だ

得意だから危險千萬だ。下の弟は全く金槌で、浮袋に乘りかゝつて居るから始末がよい。

朝の澄んだ空氣を足の先まで吸ふやうにして、氣持のよい筋肉の働と緊張を感じながらぐん〳〵鏡のやうな水面に波紋を作つて泳いで行く。水は全く水晶のやうだ。方向を轉じて磯へ泳いで歸る。弟を背中に乘せて泳ぐ。浦島太郎の龍宮訪問の爲體。傍の人が呆れたやうな顏をして見て居る。

日が高く昇るにつれて暑くなつて來る。砂の上で寢そべつて居る。體が暑くなると水に浸る。また這上つて甲羅干をやる。水陸兩棲の龜・蛙そこのけの有樣。少し疲れたのでお午とする。弟達は體に似合はずよく喰べる。なにしろ朝早くからの運動で、よほど空腹だつたらしい。石垣の向ふを、舟が帆の頭だけ出して、ゆら〳〵しながら通つて行く。

食後、船に乘ることとし、櫓や竿を擔いで乘込む。弟達が船に強くないらしいので、弱り込まれては面倒と、初から自重して、平安朝の公達でも乘せ奉つたやうに、ゆるり〳〵と押して行く。突然大きな魚がぴかりと光つて、水面上一尺ばかりも跳上つた。あつと思つた瞬間、波紋がゆらり〳〵と擴がつて行くばかりだ。砂濱へ向つて船を着ける。船の中からざぶりと飛込む。

濱へ上つて砂を搔廻して居ると、弟が蛤を見付けて大騷をする。何處からか同じ年配の子供がやつて來て、欲しさうに眺めてゐたが、思ひ切つて、「其の貝お吳れ。」と言ふ。早速「いや。」とやる。二三度押問答してゐたが、其の子供は到頭負けぬ氣を出して、「そんな貝欲しくないや。」と、捨臺詞を殘して去つた。何だか默つて見てゐて恥しい氣持がした。弟の方を見ると、何時しか貝のことを忘れてしまつたのか、專念に砂を積上げて居る。今日一日ですつかり日に燒けて、林檎のやうな頰を輝かしながら、再び船を突出して行く。弟達を船の中に入れておいて、船を後から押して行く。股から腹へ、腹から胸へと深くなつて、爪立しても追つつかない。

「えいつ。」と掛聲諸共船の上に飛上る。水滴がさつと落ちる。船は進む。青みが深くなつて行く。飛込みたくなる。ぐるりと舳を港へ向けて進む。變な競爭心を起して、他の船を追越さうとする。向ふも感づいてか、船足が早くなつた。同船人が何か囁く。弟は船底をどん〳〵蹴つて、「しつかり、しつかり。」と應援する。瀧のやうな汗を流して押して行く。稍先へ出た。一尺また一尺、じり〳〵と先へ出る。相手は斷念したのか方向を變じた。本當に勝つたやうな氣になつて港へ入る。

岩へ繫留して上陸する。もう三時だ。歸る時刻だと弟達を促して身體を洗ふ。一日中熱せられてゐたのを急に

冷したので、反抗でもするやうに全身がかつとする。弟達は既に疲れたのか、ぐづ〳〵して居るのを、歸途の氷水を約束して急ぎ立てて驛へ行く。多勢の浴客が詰掛けて居る。又あの修羅場かと、思ふさへ汗が出る。人がどよめき出した。汽車が着いたのだ。弟達の手を引いて、再び人波に揉まれながら改札口へと近付いて行つた。此の淺ましい雜沓と、何物をも抱擁するやうな海！それは何といふ面白い對照だらう。（永木生）

二　病院生活

私には、避暑時分が來ると、屹度追回する傷ましい思出がある。今年も七夕のお祭で妹が騷いで居る時に、ふとそれが頭に浮んだ。其の思出と云ふのは斯うだ。

中學三年の時、第一學期の學期試驗の始るのももう後一日といふ日の夕方、私は突然發熱した。ずつと以前から、盜汗をかいたり、劍道の時間中時々胸の後側に丁度濕つた布でも卷付けてきゆつと締付けられるやうな痛みを感じることはあつたが、それもほんの一寸の間しか續かず、すぐ良くなつたり、また血氣盛の折柄とて、別段氣にも止めずにゐたが、それが高じて俄に襲つて來たのだらう。間もなく休暇になるといふので、四五日休んで經過を見ることにした。なに、大したことはない、すぐ起きられるだらう位に思つてゐた。午前中は殆ど平熱であるのに、夕方近くなると、急に

九度
攝氏寒暖計三十九度の略

九度近くに上り、氣分は惡く、顏はほてるやうで、何だか頭が熱い。食事など運ばれても見向もしたくない。口の中は始終粘つて居る。醫師は多分肋膜らしいが、右の肺尖も多少弱つて居るから、經過によつては入院しなければならないと言つて歸つた。餘り發病が突然なので、何だか惡夢にでも魘されて居るやうな心地がして、早く目覺めてくれゝばゝ好いがと思つて、其の日は寢た。夜半幾度か眼が明いて見ると、あたりは靜かで、只頭を動かす度に氷囊の氷がからからと音立てるばかりで、一層淋しい。暫くは寢付が惡い。晝だか夜だか自分には能く分らぬやうな氣がする。電燈があか〳〵と點いて居る。私は此の時ほど電燈を熟視したことはない。而も電燈を見るといふことが、其の時の私の唯一の氣慰みであつたのだ。

其の翌日、忘れもしない七月十五日、總べての豫期は裏切られて、自分は、自分の町から十里ばかり離れた、海に面した、海岸の病院に入院することになつた。二三日前までは、魚が水中を游ぐやうに自由に快活に飛廻つてゐた生氣潑剌たる若者が、ほんの僅かの間に、味氣ない病院生活を始めなければならないやうになつた自分の運命を思ふと、恐しい死の影が眼前に震うて居るやうに思へる。何だか自分の存在が不安定になつて來た。夜が更けるに連れて、滿來る潮の音が手に取るやうに聞える。「書物も當分讀まぬ方が

宜しい。」との、晝間の院長の言葉を思ひ出して、書物も讀めないほど悪いのかなあと考へると、俄に自分の前途が暗くなるやうな氣がする。何だか頼りない寂しい氣分が襲つて來る。なぜ病氣なんぞに罹つたのだらう、なぜ適度の運動をして身體を鍛へなかつたらうと、今更愚痴をこぼしても後の祭だ。

灰色に塗られた病室の天井、申譯のやうに懸けられた壁間の變色した草花の額、總べては皆傷ましい思を起させる。最前看護婦が置いて行つた溫度表を寢ながら取上げて見た。自分の名が姓名欄に皮肉なぐらゐ鮮に書かれてある。頓て診察室の方でゆつくりと柱時計が八つ打つた。時間

はなか〳〵經ちさうにない。今頃家にゐたら、お湯に入つて居る時分だなどと思ふと、皆が揃つて食卓に着いて居る樣や、小さい妹の顏、母の寂しさうな沈んだ樣子などが、後から後から止度もなく頭に浮ぶ。と、晝間藥局の前の部屋から覗いてゐた痩せた患者の姿が眼先にちらつく。何處かで、弱い勢のない咳の聲がすると、續いて唾壺の蓋をする音が聞える。嗚呼、此の病院に居る人は皆不幸な人ばかりだ。私ばかりではなく、誰も〳〵恐しい病魔に虐げられて居るのだ。嗚呼虐げられる者よ。私は始めて病む人の不幸と寂しい心地とが解つた！

かうして、晝間は、退屈な時には、天井の板の目や節穴を數

へ、何時になつたら此の病が治るのか知らと考へては、病人特有のセンチメンタル（Sentimental）な氣分を味ひながら、長い四箇月を病院で送つた。

柿の葉の色付く頃、私は再び懷かしい人の世に歸ることが出來た。

あの暗い燈火の下で、檢溫器に自分の全運命を託してでも居るかのやうに、赤い七度の線を突破して居る細い水銀柱を見ては、幾度自分は涙ぐんだか知れない。今でも、あの當時のことを考へると、瞼が熱くなるのを禁じることが出來ない。（永島生）

平田東助
山形縣の人、嘉永二年生、法學博士、伯爵、內大臣

一二　產業の獨立

平田東助

國產奬勵の意義は、之を解釋すれば、畢竟產業の獨立といふことに歸着する。產業の獨立といふと、外國のことは一切構はずに、自國だけで產業を立てて行くことのやうに思はれるが、それでは產業の孤立といふことになるから、決してそんな意味に解釋してはならぬ。

世界の國といへば、暖い處にあるのもあれば、又寒い處にあるのもあつて、其の風土は固より同一でない。隨つて其の國々に生產するものも亦同一でない。熱帶の產物、溫帶の產物、寒帶の產物、其の他種々の風土に生產する物が、それぞれ異なることは今更いふまでもない。未開の蠻民は別

として、苟も或程度に進歩發達した國民ならば、僅か自國に産する物だけで其の需要が足るものでないことも亦多言を要せぬ。況して人文が日に開けるに隨つて、人の需要する品物の種類も數量も絶えず增加して行くから、自國の産物だけでは忽ち其の供給が足りなくなる。

平田東助

斯ういふ次第であるから、世界の各國民は、其の國の生産物に就いて、互に有無相通じて、需要供給の交換を行ふ。是卽ち貿易の起源である。歐亞東西の貿易が古くから開けて

シリヤ
アジヤの西邊
地中海の東岸
地方

世運進不息
東西歸一洋

居ることは、文獻に徵して明かな所で、極く古い時代にも、歐洲と支那との交通が盛であつた。昔、シリヤ(Syria)人は二百四十餘日を費して支那に來て貿易をした。かの葡萄の酒、夜光の盃も、當時の貿易品であつて、シリヤ人は此等の品物と支

平田東助筆蹟

那の絹織物とを交換して、ペルシヤ(Persia)・ローマ(Rome)の文明を飾つたことは、歴史の明に證明して居る所である。

私などが歐洲に行つた頃は、世界を一周するのに八十日もかゝつた。其の頃は「世界一周八十日」などと云つて、演劇

にまで仕組まれたほどで、「何といつても八十日で、世界が廻れるから偉い。」と言つて驚いたのであつたが、今日では、世界は三十六日ぐらゐで一周することが出來、歐洲と絶東とは殆ど比隣の有樣である。既に戊申詔書にも仰せられたやうに、東西相倚り、彼此相濟し、以て世界の文明が進んで來たのであるから、今日のやうに、交通は愈〻開け、人文は益〻發達する時代に、孤立などといふことは、到底爲し得られるものでなく、又爲してはならぬことである。隨つて産業も亦決して孤立することは出來ない。若し孤立するといふことになれば、則ち昔の鎖國の狀態に逆轉することになる。

然らば、産業の獨立とは果して如何なることであるかといふに、私は、之を、國民の生活及び安寧・幸福に必要な産業を確立して、國家の要する主要な物品は、專ら自國の産物で供給するやうにしなければならない、他國の輸入を仰がないやうにしなければならないといふことであると解釋する。此の意味から、國産奬勵は頗る必要な急務であると考へる。

井上哲次郎
福岡縣の人、安政二年生、文學博士、東京帝國大學名譽教授

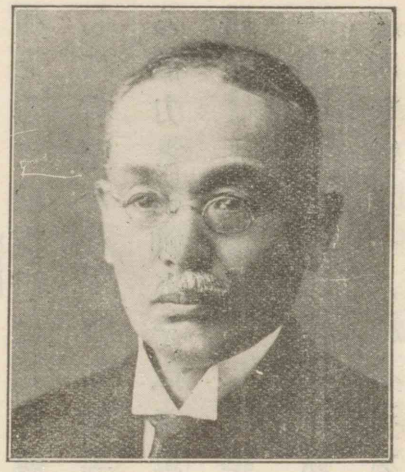
一三　實業家と精神修養

井上哲次郎

實業家と精神修養とは全く無關係なるが如く思惟する者あり。是大いなる誤なり。茲に特に實業家の修養に就きて云爲せんとするは、今の實業家の修養の缺乏に就きて深く感ずる所あればなり。

世の教育家・宗教家、その他精神修養に密接なる關係を有する者は、平生其の執る所によりて、再び修養の途に立返ることあれども、實業家にありては、事務の繁劇なるより漸次修養に遠ざかり、中には殆ど之を念頭にだに浮べざる者あり。殊に日夜商業に熱中し、利害問題にのみ腐心する者は、修養は全く他人に關することにして、自分等の關する所にあらずとの考を抱く者すら少からず。其の結果、世に隱れなき資産家にして、甚しき失敗の爲に無慙なる最期を遂ぐる者さへなしとせず。是畢竟するに、實業家が平生精神修養を等閑に附せるに因由す。吾人が實業家の精神修養に就いて聊か意見を吐露せんとするは、蓋し徒勞にはあらざるべし。

此處に實業家といふは、主に商工業に從事する人をいふ。農業も實業には相違なけれども、農業家の土着的生活は、之を商業家に比すれば、既に根本に於て相違あり。農業家は數代の祖孫相傳へ、一定の資力ありて、一定の土地に安住し、都會を離れて田舍に住み、清新なる野外の空氣を呼吸し、活潑なる定時の勞働に從事し、心身の健康を圖るに便なれば、自然に精神を修養するに適せり。彼等は常に高大なる自然界に



井上哲次郎

接觸し、鄕族的交誼を守り、質樸にして、喜んで勞役に服するの美德を存し、國民の健全なる基礎を爲すといふも過言にあらず。兵士としては勇敢にして素樸なる良軍人たり、學生としては克己にして勉强家たり。概して浮虛の點なくして有望なり。卽ち彼等は田園の勞働に依つて鍛錬したる筋力と精神とを以て萬般の事に當るが故に、其の行爲の跡まことに優秀にして整々たり。

商業家は其の生活の狀態旣に前者と異なり、寧ろ屢〻其の居所を變更するの必要あり。或は田舍より都會に、或は都會より田舍に、或は遠く海外に渡航し、爲に居所を一定せず。また一定の居所を有するものに在りても、屢〻旅行を企てざるべからざるは、其の職業上已むを得ざる所なり。

斯くの如くにして、商業家は他鄕人及び他國人に接することと多く、隨つて農業家に比すれば、其の見聞も廣く、其の知識の進步、才能の發達に於て勝る所あれども、居所一定せざるが故に、確乎たる思想上の基礎なく、動もすれば輕佻・浮薄に陷り、驕奢・淫逸に流れ、利己に偏することを免れず。且二六時中殆ど奮戰苦鬪、忽ちにして一攫千金、忽ちにして資產蕩盡、利害得失・興亡盛衰の變化、猫眼よりも急なり。別けて外國貿易に從事する者は、偶〻巨利を贏ち得れば、無暗に奢侈・放縱を極め、以て積日の辛勞を慰むる唯一の方法とす。

利益の外眼中何物もなき實業家は、對手の弱點に乘じて

自己の利益を占むることを望むが故に、知らず識らず私利私慾の奴隷となり、往々にして詐欺的狡猾手段を弄するに至る。　德義の觀念は修養によりて生ず。　かの一派の私利私慾の徒は、實に其の修養の足らざるが爲に、實業を營むに當つて人格を毀損す。　屢〻吾人の聞く所によれば、我が國商業家の外國人に信用を失墜せる主なる原因は、見本品と實物とに甚しき相違あるに由るが如し。　かゝる人々は眼前の利益に眼眩みて、斯くの如き不正不義を敢てして愧ぢざるに至る。　思うて茲に到れば、吾人は實業家の修養は單に自己修養の爲のみならず、又社會に立つ他の者に對しての本務なりと言ふを憚らず。

人或は言はん、謂ふ所の修養の如きは、我等商業家にありてはもと贅事たるに過ぎず。　商業の目的は利益を得れば足れり、豈他を顧みる遑あらんやと。　果して然るか。

實業家の目的とする利益問題は、詮ずるに吾人よりして之を觀れば、人間最後の目的にはあらず。　金錢・財寶は人間としての目的を達する爲の一手段たるのみ。　金錢・財寶は唯かゝる手段に用ひらるゝに於て價値を有するものなり。然らずんば、這は寔に泥土・塊石のみ。　此の貴重なる目的の存すればこそ、生命は此の目的と共に終始して、永久に存續するを得といふべけれ。　繰返して言ふ、總べての實業は、其の商工農の何れたるを問はず、此等の人間の最高目的に達

する物質的資料を豐富にする手段に過ぎざるのみ。物質的資料の豐富なるに依りて、人間の能事畢れりと言はば、誠に淺慮のみ短見のみ。

一身の修養未だ完からずして、唯私利・私慾にのみ趨る、是基礎なくして屋梁を架する者なり。德義の觀念低き國家にして、未だ曾て良好なる發達を爲したる例なし。修養なき實業家の所謂成功といふものは、狡猾・陰險によつて幸に巨萬の財を積めるのみ。人はたゞ財產其の物の勢力に媚附すること、恰も蟻の蜜に集るが如し。されど、蜜盡くれば則ち蟻散ず。かの滔々たる財產家と稱するもの、其の財產を除去すれば、其の剩す所實に眇たる一匹夫のみ、一點の尊

敬すべき所なきなり。されば、株の暴落、銀行の破產等によりて財產を失ひたる無修養の人々にありては、金錢以外には何物を以ても之を救ふこと能はざるに至る。唯人春秋を重ね經驗を經るに及んで一念茲に及び、富貴・權榮の浮雲の如く、塵世のこと恃むに足らざるを自覺することあるべしと雖も、時既に遲し。頽齡・衰軀、企つる所何をか成し得んされば、一日も早く相當の準備を爲して、專心に修養の道を辿るべきなり。（倫理と教育）

吉田兼好
本姓卜部、鎌倉末期の文學者、正平五年（一三一〇）歿、年六十九

一四　仁和寺の僧

吉田兼好

一

仁和寺　山城國、京都の西郊、光孝天皇の勅願寺

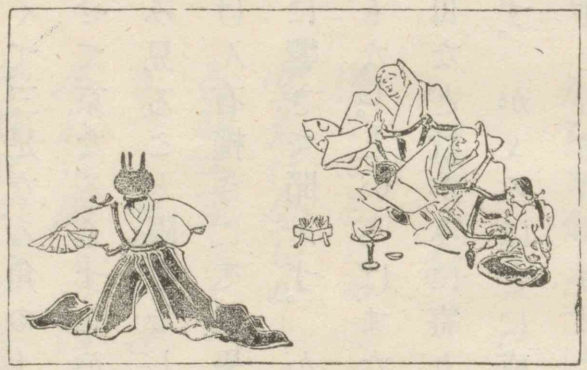
極樂寺・高良神社　ともに男山の麓にある

仁和寺に、ある法師、年よるまで石清水を拜まざりければ、心うく覺えて、或時思ひ立ちて、たゞひとり徒歩よりまうでけり。極樂寺・高良などを拜みて、かばかりと心得て歸りにけり。さて、かたへの人に逢ひて、「年頃思ひつること果しはべりぬ。聞きしにも過ぎて尊くこそおはしけれ。そも參りたる人ごとに山へ登りしかど、神へ參るこそ本意なれと思ひて、山までは見ず。」といひける。ゆかしかりしは、何事かありけん。少しのことにも先達はあらまほしきことなり。

吉田兼好

浮田一蕙　京都の人、土佐派の畫家、安政六年（一八五九）歿、年六十五

これも仁和寺の法師、童の法師にならんとする名殘とて、各遊ぶことありけるに、醉ひて興に入るあまり、傍なる足鼎を取りて頭に被きたれば、つまるやうにするを、鼻を押平めて顏をさし入れて舞出でたるに、滿座興に入ること限りなし。暫し奏でて後、拔かんとするに大方拔かれず。酒宴ことさめて、「いかゞはせん。」と惑ひけり。とかくすれば、首のまはり缺けて血垂り、只腫れに腫れて、息もつまりければ、打割らんとすれど、たやすく



鼎かづき（浮田一蕙筆）

割れず、響きて堪へがたかりければ、かなはで、すべきやうなくて、三足なる角の上に帷子を打掛けて、手を引き杖を突かせて、京なるくすしがりゐて行きけり。道すがら人の怪しみ見ること限りなし。くすしの許に差入りて、向ひゐたりけん有樣、さこそは異樣なりけめ。物をいふもくぐもり聲に響きて聞えず。「かゝることは書にも見えず、傳へたる敎もなし。」といへば、また仁和寺に歸りて、親しきもの老いたる母など枕がみに寄りゐて泣悲しめども、聞くらんとも覺えず。かゝるほどに、或者のいふやう、「たとひ耳・鼻こそ切れうすとも、命ばかりはなどか生きざらん。只力を立てて引きたまへ。」とて、藁のしべをまはりに差入れて、かねを隔てて、首

もちぎるばかり引きたるに、耳・鼻缺けうげながら拔けにけり。からき命まうけて、ひさしく病みゐたりけり。（徒然草）

野口米次郎
愛知縣の人、明治八年生、英文學者、詩人、慶應義塾大學敎授

一五　秋

野口米次郎

僅か二三日のこゝで
空氣は金びかりし始めました
白羽二重をその中に晒したなら
きつゝ黃色に染まりませう
今私は廊下の障子を開け
十月なかばの空氣を吸つて
その甘いのに驚いて居ると

何處からの無數の赤い蜻蛉が飛んで來て、
私の眼前で入交り
黃金の空氣を波打たせます

澤山ある花の中で私は木犀を一番好きますよ
葉の下から小さな内氣な花が咲いて
人の知らない間に散つてしまふ
暑い夏から咲通して來た百日紅も
今は二つ三つの花ゞ殘つて居るばかりで淋座います
しばらく雨が降らないで

伽羅の黑光する葉も汚れ
廊下に懸けたカーテンの染が特に目立つて來ました
地面は最早薄ら冷たいので
今日は一足の蟻さへ出て參りません

あゝ秋が來ました私の好きな秋が來ました
私ゞ座敷から澄切つた紫色の空を眺めてゐると
何時の間にやら私の目は見えなくなつて
私の耳へ過ぎ行く「時」の足音だけが響いて來るやうに覺えます……

どうん〳〵と沖承知の「時」の足踏が　（東京朝日新聞）

一六　田園都市

田園都市、花園農村の名は、絶えて我が國に聞かざりし所なり。されど、其の實體に就いて之を言へば、何ぞ必ずしも一の田園都市なしとせんや、豈亦一種の花園農村なしとせんや。試に平安の舊帝都を見よ、山紫水明、最も天然の風光に富み、春は東山の櫻花、人は宛ら雲霞の裡を行き、秋は西山の紅葉、花よりも紅にして、路行く人の筇を停めしむ。清瑩玉の如き賀茂の水、翠綠滴るが如き吉田の杜、かゝる風趣は市人の胸塵を洗ひ去りて、轉た一段の爽氣を感ぜしむ。禁裏

桓武帝
第五十代

を中心として東西に開き南北に通ずる街衢の井然たるは、泰西の識者が近頃理想の都市として推稱する、方形若しくは長方形の街區を實現せるものにあらずして何ぞや。而も桓武帝が山河襟帶自然に城を作すと宣ひて、此の山城の地に始めて都を奠め給ひしは、遠く一千有餘年の昔に屬す。時は古今を距て、地は東西を別つと雖も、今泰西の識者が新に唱へて、刻下主要の問題となれる所の田園都市が、夙に我が國に存するは快心の極みならずや。

自然の風趣を備へて、おのづからなる田園都市の態樣を備ふるもの、豈獨り京都のみならんや。現に人口二百萬以上を算する今日の帝都すら、大廈高樓の間、自ら天然の風物

を配して、其の趣を新たならしむ。人口稠密の帝都尚かくの如し。況や地方の都市にありては、山に倚り水に臨み、遠く之を望めば、人家何れも綠樹の間に隱見せり。必ずしも戸毎に農園を備ふるにあらざれども、自ら田園の趣味を帶びざるはなし。去つて更に村落を見んか、菜園黃を飄し麥隴綠を漲らすの處、雞犬の聲相和し、碁布井然たる田の面、松杉高く天を衝く森の此處彼處に茅檐の散點する樣、さては其の間に四季折々の草花が籬の根を彩れるなど、自然の賜何ぞそれ無限なる。此の如く天然の美を鍾めたる一幅の繪畫は、我が國到る處の農村に於て之を見る。之に冠するに花園農村の名を以てすとも、誰か不可なりとせん。

白鳥省吾
宮城縣の人、明治二十三年生、詩人

我が國の都市、農村は、其の形より言へば、夙に泰西人士の唱道せる田園都市、花園農村に比して、寧ろ優れりとも決して劣れる所なきなり。（田園都市）

一七　田園の縱走

白鳥省吾

轟く鼓動と爆音と
眩暈する早さで
我が自動車は疾走する
月は雲に見え隱れ
白く續く一路

部落から田へ
田から部落へ
何時までも何里も
自動車は疾走する

今夜はちやうど盆で
部落の低い家並にともる提灯線香の匂
物を煮る匂
ちら〳〵する若い娘の白地
若い絮の油ぎつた顔
中まで見える屋内や路傍などに居る子供老人女房等

の生活の瞥見
それらを壓倒し震駭させて行く自動車から
フィルム Film のやうに見えるそれら人情的な古驛の匂

自動車はまた廣々とした田の中を
大風の如く疾走する
漂ふ稻の香が濃く懷かしく私を打つ
それらは總べて古い祖先からの匂だ
強いヘッドライト Headlight に照し出される向ふから來る村人
時には普請の終へぬでこぼこの河岸を

村井知至
文久元年生、英語學者

簷に擦れ〳〵の狹い路を
勾配の急な坂を突破し
部落から田へ
田から部落へ
あらゆるものを刹那に味ひ興奮し把握し高調する
鳴りはためく自動車の疾飛よ
ガソリン(Gasolene)の匂と稻の香に羽搏きながら
たゞ樂しく命知らずの疾飛だ　（文章倶樂部）

一八　第一義

村井知至

「墨が磨れたかな。」高泉和尚は大きな筆を取上げた。傍には高弟の大隨長老が侍つてゐた。

高泉和尚
名は性潑、清國福州の人、高僧、宇治萬福寺の第五世、元祿八年（一六九五）歿、年六十三

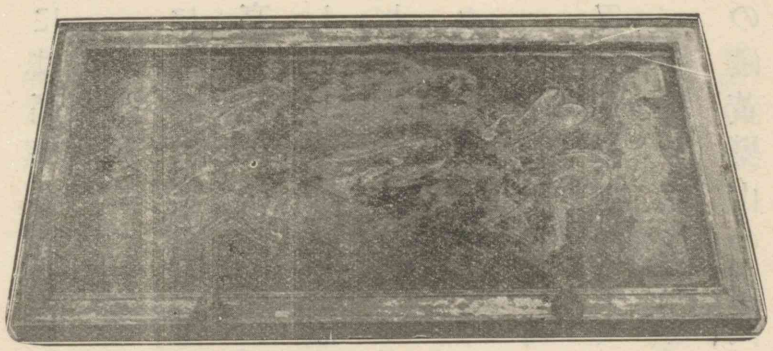
筆を揮つて認めた「第一義」の三字の額面は、墨痕淋漓、如何にも鮮かな出來榮であつた。一山の僧徒は皆「流石は師老高泉和尚の筆蹟だ。」と感歎した。然るに、傍にゐた大隨は何と思つたか、件の額面を引取つて「これは第一義になつて居りませぬ。」と言つてずた〳〵に引破つて了つた。一座は皆色を失つた。

黃檗山
京都府宇治郡宇治にある黃檗宗の總本山萬福寺

「さうかな。」和尚は斯う言つて、再び筆を把つた。大隨は又それを引破つて了つた。

「これも駄目かな。」和尚は三度筆を走らせた。「こんなものは黃檗山の山門には掲げられませぬ。」大隨は斯う言つ

當山第五代
第一義
高泉



黃檗山山門の扁額

て、又それを反古にして了つた。和尚は四度筆に墨汁を含ませた。

一座の者は、大隨の不禮を怒ると同時に、高泉和尚が激怒されはしまいかとはら〳〵してゐた。「駄目です、成つて居りませぬ。」大隨は又もそれを丸めて了つた。一同は手に汗を握つた。

黃檗山山門の扁額

墨汁はまさに盡きようとしてゐた。和尚も是に至つては、老體根盡き、力拔け、氣は苛立つたのであつた。併し、大隨の我儘を叱らうとはしなかつた。

大隨はふと座を立つて廁に往つた。大隨の姿が襖の蔭に見えなくなつた時、和尚は重い息を吐き、兩眼を閉ぢて、暫く默然としてゐたが、頓て「これが最後だ。」と叫んで、法衣の袖を搔捲つて大筆を揮つた。其の眼は炬の如く輝き、其の口は堅く一文字に結ばれてゐた。一座の者は肅然として襟を正した。書畢へた和尚はばたりと筆を投じて、再び雙眼を閉ぢ、太い〳〵底力のある息を吐いた。そこへ戻つて來た大隨は、じつと其の文字を見詰めてゐたが、忽ち「第一義。」と大きく叫んだ。そして、小躍りして喜び勇んだ。

山城國宇治の黃檗山の門頭に掲げられた第一義の文字の扁額は、斯くして物せられたのであつた。（人生と趣味）

上田敏
東京市の人、英文學者、文學博士、京都帝國大學教授、大正五年歿、年四十三

桑港
サンフランシスコ、米國合衆國の都會、太平洋岸の最大貿易港

一九　世界の歌枕

上田　敏

大西洋の浪は太平洋のそれとは幾分違つて居る。太平洋の浪は大きく緩く打つが、大西洋のは、多く天氣が惡い爲か、とにかく稍黑ずんだ、時としては鉛のやうな色に見える。だが、緯度が次第に高くなるに連れて、浪の色は淡く、入日の華やかさは違はないが、夕雲の色彩も漸くあつさりとして、南海の絢爛な色よりも却つて美しい。

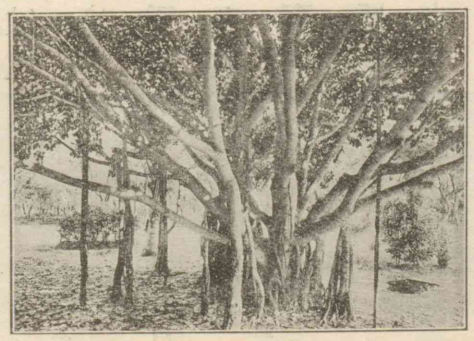
太平洋で私の遭つた大浪は、桑港に着く三日ばかり前の一日だつた。小山のやうな浪が寄返るので、さしもの大船も木の葉のやうに動搖したが、幸にも此の日は頗る上天氣で風もなかつたから、甲板の上で其の壯觀を味ふことが出

金門灣
米國合衆國の西岸、サンフランシスコ灣口の關門

來た。大西洋には一體に山なす巨浪は少いが、米國を去つて五日後の一日、暴風雨に類した天氣に出逢つた。要するに、海の景色は取出でて人に語ることは困難だが、經驗のある者が後日追想すると、單調なやうで實は千變萬化する美觀を憶ひ起す。是實に究竟の歌枕。又桑港の港近くなつた海の上、數百羽の鷗が船に沿うて舞つて居る所から遙に眺めると、金門灣頭の大浪が港口に押寄せる有樣、水の屏風を立廻したやうに、海の上にも瀧があるかと疑はれた。是はた歌枕に逸することが出來ない。

金門灣

陸上の景色は土地によつて著しい相違がある。ハワイ Hawaii のやうに、四時氣候を同じうして、太平洋の樂園と稱される地に行くと、滿目の風光が一變して、始めての人には非常に面白い。遠淺の海が極めて澄んだ萌黃色に見えて、それに椰子の林をあしらつた風情は、繪畫で見るよりも實際の方が不思議なぐらゐに美しい。是からの人が歌枕の一つとすべき處だらうと思ふ。其の地の公園に遊んだ時、蔚然たる榕樹の下枝に放飼の孔雀が止つてゐて、其のあてやかな羽毛が花のやうだつたのを記憶する。


榕樹

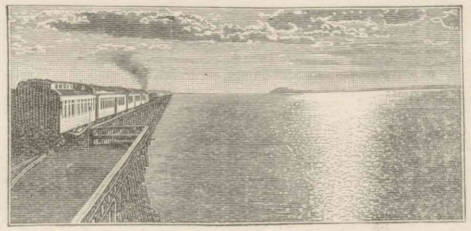
ハワイ　北太平洋中に在る、十餘の群島から成る、もと王國であつたが、今は米國合衆國領、首府はホノルル

熱帶地方は言ふまでもないが、歐米の風光は日本に比していたく趣を異にして居る。かの國には我が國よりも草木が尠い。見る山も〳〵、日本のやうに松・杉が山全體を蔽うてはゐない。あるは芝山のやうな、あるはたゞ岩石ばかりのやうな山の處々に、偶〻青々した樹木が十數本繁つて居るといふ風の景色が多い。それで、日本人は動もすれば我が國の風景に草木の多いのを誇稱するが、それは稍偏した見地であつて、兩方ともそれ〴〵の美しさがあるのは無論である。併しながら、土地の極めて磽确なのは勿論景色が好いとは言はれない。私が米國を通過した頃は、殊に冬枯の時だつたから、人げない物寂しい廣漠の野を行く心地が

した。概してあちらの木はひねくれてゐない。皆すうつと直立して枝は地上數尺の處から四方に向つて規則正しく手を擴げて居る。斯う規則正しくなつて居る枝ぶりは如何にも風趣が乏しいやうだが、實際はさうでない。

更にアメリカ(America)の歌枕一二を擧げると、先づワイオミング(Wyoming)の平原であらう。眼の屆く限り一物もなく、雪がちら〳〵降つて居る中を、たまに羊の群が、鐵道線路のあたりをさまよふなどは、優美な姿には缺けて居るが、一種壯大な趣がある。

名にし負ふサルトレーク(Salt Lake)を中斷する長路を通ると、平原の



サルトレーク

ワイオミング　米國合衆國西部の州名

サルトレーク　米國合衆國ユタ州に在る

間に丘陵が起伏して、雪斑の岩角に朝日の反射する景色、是亦歌枕の價値があると言はねばならぬ。又コロラド(Colorado)州の北、所謂キャニオン(Cañon)の一部は、奇石・怪岩が路傍に磊々として、さながら鬼工と思はれる。此の景も歌枕に逸することが出來ない。

さて、此の歌枕といふ詞を、今少し意味を廣くして見たいと思ふ。卽ち山水の風景ばかりに止めず、進んで紅塵萬丈の市街や、煤烟の立昇る工場の光景なども、詩歌に寫し出せば面白いだらう。例へば、ニューヨーク(New York)の摩天閣(スカイスクレーパー Sky scraper)なども、其の或物は建築美を持つてゐないが、中には一種の新しい趣味

ブルークリン橋

キャニオン　米國合衆國西南の河、名高い峽谷

ニューヨーク　米國合衆國第一の大都會

ブルークリンの釣橋
ニューヨーク市に在る、西暦一八七〇年から約三十年で竣工した長さ五六〇〇呎の釣橋

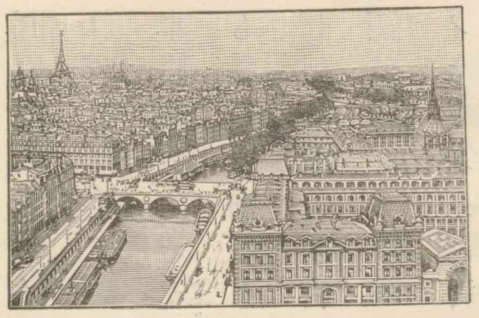
ホボーケン
ホドソン地方の都會

ウォールストリート
ニューヨーク商業の焦點ブロードウェーの一角

の徹底して居るものがある。ブルークリン(Brooklyn)の釣橋の上からニューヨークを望むと、建列ねた大廈高樓が雲に聳えて、殊に、薄暮には二十階・三十階の窓の灯が空の星かとばかり閃いて居る。或はホボーケンの港口、朝霞の景、夕靄の色、他國にはない趣致がある。更に人情・風俗を加へて景色を見ると、愈〻好箇の歌枕がある。ニューヨークのマヂソンの大辻、世界の富を集めた繁華な場所に立つて、イタリー(Italy)の移民が彈く哀れなバレルオルガン(Barrel-organ)の音を聞くと、音こそは細いが、近代文明の弊害を呪ふ切實な音樂かとも聞える。ウォール(Wall Street)ストリートの執務時間に、其の邊を通ると、萬人が黃金の爲に血眼になつて狂ふ有樣に、賭博場を見るよりも猶慘

ニューイングランド
米國合衆國東部の人口稠密な部分

シャンゼリゼエ
パリの大路


セエヌ河

慘たる感を催す。又之とは反對に、冬の田舍に入つて見ると、葉の落盡した楓樹の竝木路を、雪を蹴つて小學兒童の走つて行く所などは、「若い米國萬歲」の聲を發したい程に、ニューイングランド(New England)の田舍の景色は、落着いて若々しい、如何にも懷かしい感を與へる。

歐米の大都會中何處が好いかと問はれたならば、誰も〳〵賞めるのはパリ(Paris)であらう。市街の美觀、道路の整頓は言ふに及ばず、氣候の溫和、風俗の雅致、かういふ處に住んで詩でも詠んでゐたいとは、誰しも望む所かと思ふ。シャンゼリゼ(Champs Elysees)

ゼエの大通は長安の盛時もものかは、端麗高雅、實に世界第一である。歌枕は何處にもごろ〳〵して居る。文明の最高に位するのはフランス(France)である、さうしてパリである。それで又極めて華美な中にも、何となく仙人めいた趣もある。車馬絡繹たるセエヌ河(Seine)のほとりに、悠然綸を垂れる隱君子もある。橋の下には犬の理髮床がある。河岸の石垣の上にはお馴染の古本屋がある。其の他、ノートルダム寺(Notre Dame)の建築はゴシック式(Gothic)の標本で、朝夕の色の變化が著しい。嘗てノートルダム寺の總べての變化を味はうと、一晝夜の間眺望したこともあつたが、最も美觀を極めるのは夕方で、黄金の光の波を浴びた景色を、サンミシェールの橋から眺めた

サンミシェール　セエヌ河に架した橋の一

時だつた。又夜のしらゝ〳〵あけに、朝風の心地よく頰を拂ふ時之を望むのも好い。眞珠の色を曇らせたやうな色から、薔薇色の派手やかなのに至るまでの色合の微かな影を味ふことが出來る。其の外、花を賣る老媼の風、シャルロットの帽子を被つて、ボール箱を抱へた店通ひの賣子の姿、ペルシロンといふ牛よりも大きい馬を曳く馬丁の振、夜半近く芝居のはてに雨が降つて、幾千の街燈の光が敷石に映る所、自動車は唸り馬車は軋る不夜城の壯觀、滿目の時勢粧は悉く歌枕でないものはないといふ趣がある。

ロンドン(London)は景色の地として左程に人は賞めないが、色彩の變化、其の色合の豐富な點は、ターナー(Turner)の繪にある通りで、

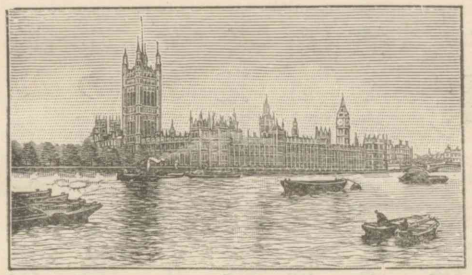
ターナー　英國の風景畫家(1775-1815)

テームス　英國の主要な河、長さ二二八哩

リッチモンド　ロンドンの西九哩に在る

ナポリ　同名の灣に臨んでゐる

風景美は尠いが、光線の變化は味ふ値がある。併し、同じく風光を味ふにしても、住心地のよいパリがあらゆる旅客の賞揚する所だと思ふ。只ロンドンにもテームス上流やリッチモンド近傍の兩岸の風景などには、英國特有の美觀がある。



テームス河

此の他、風車、朱い屋根、清い淀に名のあるオランダ(Holland)もよく、イタリーではナポリ(Napoli)あたりの夢のやうな景色も好い。スウィス(Swiss)は風光が明媚だと稱される國で、

オランダの風車

ザルツブルヒ　東アルプス山脈の北邊、山水秀麗の地

イギリス海峽　英佛兩國間の海峽、最狹二一哩、最廣一一〇哩、長さ二八〇哩

紅海　アラビヤとアフリカとの間に在る細長い海

誰も皆賞揚するが、私は寧ろドイツ(Deutschland)を採る。其處のザルツブルヒ(Salzburg)の風景は日本に酷似してゐる。

要するに、何處が一番風光が絶佳であるかといふ問題は、一概には定め難い。見る人の心々によつて、天下到る處、いかなる地、いかなる處でも、皆相當の美を味ふことが出來るものである。涙の激しいイギリス(English)海峽の船の上でも、暑さの堪へ難い紅海の甲板でも、それ〴〵の美しさが感じられよう。古來歌枕などと取出して定めるのは、或は間違つてゐはしまいか、天下皆歌枕ではあるまいか。（心の花）

二〇　海運業の消長と國家の盛衰

海運の興廢・消長は國家の盛衰を左右するものにして、國權の伸張、國民の福祉、一に繫つて斯業の隆替に存するは、世界萬國の歷史が繰返す所、古來一として此の理を踐まざるはなし。見よ、かの歐洲の南端に位するポルトガル(Portugal)は、彈丸黑子の一小國を以て、夙に地中海の貿易を獨占し、遠く印度に航路を開きて、第十五世紀の初、既に海上の覇權を握りたるにあらずや。而

コロンブスの復命を受けてゐるイサベラ

イサベラ
(1451—1504)

して之と相隣するスペイン(Spain)は如何。貞淑なる皇妃イサベラ(Isabella)の海事に熱心なる、かのアメリカ大陸の發見となり、威權赫々、新大陸の盟主と仰がれたるにあらずや。其の他、オランダの如き、一時は七萬噸以上の船舶を有して、宇内に跋扈せしにあらずや。或はスウェーデン(Sweden)・ノルウェー(Norway)の如き、區區たる半島國を以て、依然大陸の間に介立して、其の獨立を完うせるにあらずや。或は又英國の如き、眇乎たる海中の一礁島を以て、而も其の國威天下を風靡し、版圖六大洲に跨りて、政略上・商略上共に宇内の第一位を占むるにあらずや。これ一として海權を恢弘し航權を伸張したる結果に由らざるはなし。而して其の蘭といひ西といひ葡といひ、曾て

天下を睥睨せし勢も、盈つれば虧くる世の習、あはれ積年の國威衰運に傾き、史上只其の殘影を留むるに至りしは、抑、又既往に得たる航權を失ひしに基因せずんばあらず。殷鑑遠きにあらず、我が日本帝國民たるもの、豈それ遠く宇内の大勢に鑑み、近く方今の實況に照して、大いに顧みる所なくして可ならんや。

フェニキヤ　地中海の東海岸にある、西紀前七五年頃まで商業國として榮えた

カルタゴ　今のチュニスの附近にあつたアフリカの古市

且それ、海運業の消長は主として地理上の形勢に伴ふこと多し。小アジヤ（Asia）豆大の土を以て、能く富强の間に覇を唱へたるフェニキヤ（Phenicia）の如き、或はローマ（Rome）大帝國を震動し、一時雄を海上に爭ひたるカルタゴ（Carthago）の如き、或はペルシャ（Persia）百萬の大軍を挫き、之を西に進ましめざりしアテネ（Athénai）の如き、何れも

アテネ　ギリシャの首府

ノルマン人　西紀一〇六六年英國を征服した人種

海岸凸凹屈曲して、天賦の地形良好なるにより、早く海運の勃興を見たり。更に方今の海上王英國を見るに、其の本國は四面環海の礁島にして、波濤岸を嚙んで白浪蕩汨し、天與の地形最も海運の隆盛に適す。たとひ豪膽斗の如きノルマン（Norman）人の勇氣なくとも、天與三千六百餘里の海岸線は、終に英國をして世界無比の海商國たらしめずんば已まざるなり。況や由來英人は世界を以て家と爲し、海上を以て席となすに於てをや。

顧みて帝國の地勢を察すれば、眞にこれ東洋の大英國にして、大小幾多の島嶼は南北に延びて、海岸線の延長凡そ八千里、世界廣しと雖も、其の海國たる天分と地勢とに於て、何

ウラジオ
ウラジオストックの略

れの國か我が國に若くものあらん。西北一體は本土より一衣帶水を隔てて支那・ウラジオ(Vladivostok)に對し、東は煙波汪洋として、太平洋を隔てて遙に北米大陸に向ひ、南はフィリッピン(Philippine)・ニュージーランド(New Zealand)等、點々相接して南濠の天に連り、西は印度洋・地中海を渡りて歐洲に通ず。又近く太平・大西兩洋間の交通を便ならしむるパナマ(Panama)運河の通ぜるあり、アジヤの北部を一貫するシベリヤ(Siberia)鐵道の既に成れるあり。我が國の形勢は、之を前世紀に比すれば全く一變して、今や世界海運の中心となれり。茲に局面益〻多端を加へて、東洋は正に列國競爭の燒點となり、政治的・貿易的一大活劇場たらんとするにあらずや。

惟ふに、我が帝國は國光四表に輝き、國威八紘に及び、絶東の島國は一變して東洋の海國となり、東洋の海國は一躍して世界の强國となれり。名譽の光榮を荷うて、萬邦環視の中に立ち、益〻その榮譽を增進せんと欲せば、須らく三大洋上の航權を握るべし。而して之を握らんと欲せば、益〻海運を興し、船舶を造り、海員を養ひ、航路を擴め、國民一致協同して、進取的海國の大計を畫するに遺憾なきを期せざるべからず。海運勃興して國家の富强期待すべく、海運發達して貿易振起すべく、海運殷昌にして工業興起すべく、海運隆盛にして植民のこと始めて語るに足るべく、其の他、百般の事業始めて茲に完備するを得べし。

抑我が帝國は海國の要素に於て世界萬邦に比儔なき形勝を占め、實に未來海上の盟主たる運命を有す。故に海國としての我が長所を發揮すれば、世界の航權を握ること敢て難きにあらず。何を以てかしかいふ。曰く、港灣の多きこと、曰く、石炭に富むこと、曰く、勞働賃金の低廉なること、以上三件は海國の要素に於て必須缺くべからざるもの、而して我が帝國獨り之を完有す。誰かまた其の未來の運命を疑ふものぞ。（「歐洲再航錄」に據る）

中編

一　金言（一）

一字千金。

大器晚成。

天知地知。

同病相憐。

唇亡齒寒。

月滿則虧。

人萬物之靈。

任重而道遠。
前車覆後車誡。
孝者百行之本也。
人間萬事塞翁馬。
功成名遂身退天之道。

二　金言（二）

先入爲主。
至誠如神。
仁者無敵。

土積成山。
禍從口出。
仰天而唾。
報怨以德。
吹毛求疵。
抱薪救火。
掩耳偸鈴。
隔履搔痒。
畫蛇添足。

三　金言（三）

良藥苦於口。
誠於中形外。
養虎自遺患。
百聞不如一見。
巧詐不如拙誠。
忠臣不事二君。
入寶山空手回。
有志者其事竟成。
死諸葛走生仲達。

有陰德者必有陽報。
一犬吠形、千犬吠聲。
寧爲雞口、无爲牛後。
桃李不言、下自成蹊。
蓬生麻中、不扶自直。
一指蔽目大山弗見。
行百里者半九十里。

四　金言（四）

近朱赤、近墨黑。

心欲小、志欲大。

知者不言、言者不知。

前門拒狼、後門進虎。

人窮計拙、馬瘦毛長。

膠柱調琴、刻船索劍。

豹死留皮、人死留名。

好事不出門、惡事行千里。

智者千慮必有一失、愚者千慮必有一得。

積善之家必有餘慶、積不善之家必有餘殃。

千羊之皮不如一狐之腋、千人之諾々不如一士之諤々。

五　實語教（一）

玉不磨無光。無光爲石瓦。人不學無智。

無智爲愚人。倉內財有朽。身內才無朽。

雖積千兩金。不如一日學。

六　實語教（二）

敬老如父母、愛幼如子弟。我敬他人者、

他人亦敬我。己敬人親者、人亦敬己親。

欲達己身者、先令達他人。見他人之愁、
即自共可患。見他人之喜、則自共可悅。
見善者速行、見惡者忽避。好惡者招禍、
譬如響應音。修善者承福、宛如隨身影。

七　五條誓文

一、廣興會議、萬機決于公論。
一、上下一心盛行經綸。
一、官武一途至庶民、各遂其志、使人心不倦。
一、破舊來之陋習、基天地之公道。
一、求智識於世界、大振起皇基。

八　題壁

釋月性

男子立志出鄉關、學若不成死不還。
埋骨豈期墳墓地、人間到處有青山。

九　示諸生

廣瀨淡窓

休道他鄉多苦辛、同袍有友自相親。
柴扉曉出霜如雪、君汲川流我拾薪。

釋月性
號は清狂、周防國妙圓寺の住僧、幕末の志士、安政五年(一八五八)歿、年四十二

廣瀨淡窓
名は建、豐後國の人、德川末期の詩人、安政二年(一八五五)歿

朱熹
字は元晦、號は晦庵、南宋の大儒（1130—1200）

東照公
德川家康

中村和
號は栗園、大分縣の人、學者、明治十四年歿、年七十六

一〇　偶成

少年易老學難成、
一寸光陰不可輕、
未覺池塘春草夢、
階前梧葉已秋聲

德川家康とその自署

朱熹とその自署

朱熹

二　東照公幼時

中村和

東照公、幼在駿。土人以端午日、作石戰戲。觀者分黨助之。

保己一
塙氏、武藏國の學者、文政四年（一八二一）歿、年七十六

重野安繹
號は成齋、鹿兒島の人、文學博士、貴族院議員、明治四十三年歿、年八十四

公年甫十歲。騎奴肩、往觀之。一隊三百餘人、一隊半之。人爭赴衆。公命奴就寡。奴怪問之。公曰、衆者恃勢、其心不一。寡者懼而專力。其勝必矣。果如其言。（日本智囊）

三　保己一講書

重野安繹

塙保己一、嘗爲門人、講源氏物語。方暑夜。風滅燭。衆曰、「請且停講。燭滅矣。」保己一笑曰、「何有眼者之不便也。」

塙保己一

三　孟母斷機

孟子既長、出就外師。及學而歸、母問學所至。孟子曰、「如舊。」母以刀斷機上織曰、汝中道廢學、猶吾斷此織也。」孟子懼、旦夕勤學不息、遂成大賢。（蒙求）

四　陶侃運甓

晉陶侃爲廣州刺史。在州無事、則朝運百甓於齋外、暮運於齋內。人問其故。答曰、「吾方致力中原。徒爾遊逸、恐不堪事。」

孟母斷機　（中村不折筆）

菅原道眞
平安朝の學者
右大臣、延喜
三年(一九三)歿
年五十九

一五　格言

身體髮膚、受之父母。不敢毀傷、孝之始也。立身行道、揚名於後世、以顯父母、孝之終也。（孝經）

一六　九月十日

菅原道眞

去年今夜侍清涼
秋思詩篇獨斷腸
恩賜御衣今在此
捧持毎日拜餘香

菅原道眞

梁川星巖
名は孟緯、美濃國の詩人、安政五年（一八五八）歿、年七十

嗚呼忠臣楠子之墓

一七　大楠公

梁川星巖

豹死留皮豈偶然
湊川遺跡水連天
人生有限名無盡
楠氏精忠萬古傳

湊川神社境内
楠公碑文

賴襄
通稱久太郎、號は山陽、安藝國の儒者、天保三年（一八三二）歿、年五十三

一八　義家學兵法

賴襄

源義家賴義子也。稱八幡太郎。材武善射。從父討安倍貞任夷之。嘗過藤原賴通第、談陸奥戰事。博士大江匡房在別室。聞之曰、「好男子、惜未知兵法。」從者微聞之、愠告義家。義家曰、「其或然。」見匡房出禮之、遂就學焉。後三年、役、攻金澤柵、去柵數里、望見雁行亂、曰、「是有伏也。」從兵搜索。果獲麓之。謂衆曰、「兵法言、鳥亂者伏也。」我不學則殆矣。」

一九　函人

中村　和

某侯使函人作鐵甲、成。欲試之矢。函人曰、「臣能以身當之。」乃擐其甲而坐。侯命善射者、以強弓・到矢・利鏃

射之。中胸、鏗然矢躍而不入。侯曰「善。吾既試其前矣。未知其後如何。將試其背。」函人釋甲而號曰「臣未慣作怯者甲。請辭。」侯曰「吾過矣。」賞之以金。

後編

須臾 しばらく

一　獨立の法

福澤諭吉

人には自信自重の心なかるべからず。自分はこれだけの智德を備へて、世にも愧しからず、隨つて自分の身は尊きものなりと自ら信じ自ら重んずるの趣意にして、獨立心の由つて生ずる本源なれば、百般の人事に通じて須臾も離るべからざる一大義なれども、扨獨立の心を抱きながら獨立する所以の方便を得ざれば、其の心常に淋しくして、人生の苦痛これより大なるはなし。

何をか獨立の方便といふ。衣食住の物卽ち是なり。天道は人を殺さず、正直に勉强さへすれば世を渡ること易しといふと雖も、又一方より見れば、利を好むは古今普通の人情にして、萬人は萬人恰も申合はせたる如く、苟も利のある所に群集す。其の群集の中に割込みて、我も亦共に一部分の利を求めんとす。之を名づけて競爭といふ。至極殺風景にして、君子の心に樂

しからざる次第なれども、さりとて、衣食は天より降らず地より涌かず、木石ならざる身を以て、家に居り世に處し、他人の厄介を免れて獨立の義を全うせんには、此の競爭場裡に營々辛苦せざるべからず。人間の行路亦難しといふべし。されば、我々の獨立心をして眞に獨立の實を得しむるものは有形の財物にして、此の財物を得るの法は極めて艱難なれば、之を得んことを勉むると同時に、之を費すの法に就いても亦考ふる所なかるべからず。是に於てか、吝嗇と儉約と二者の區別如何の問題を生ずべし。慈悲の情に乏しく、廉恥の心を失ひ、道理の界を逸して財を貪るものを吝と名づけ、一身一家の生計を密にして、外面の邊幅を張らざるを儉といふ。誠に簡單明白なる區別にして、苟も士君子の心あらんには、吝ならんと欲するも得べからざる次第なれば、獨立の義を全うせんとならば、吝嗇を避くると共に、節儉の旨を忘るべからず。家計を綿密にして、省くべきの浪費を省くは、錢を吝しむにあらず、獨立の根本を厚くする爲なり。一夕の豪遊に千金を抛ち、冠婚葬祭の式に外觀を張り、以て鄕黨朋友の耳目を驚かすが如き、愉快は卽ち愉快にして、家計の許す限りは此の種の愉快を買ふも亦人情の當然なれども、家の裡面の不如意を包んで、分外の財を散じ、或は前途の實際に望むべからざる望を空想して、未得の錢を既得に數へ、暫時の融通と稱して他人の金を借用し、其の理由を問へば、一身一家の體面を維持する爲に止むを得ざるの費用なりと云ふ、理由とするに足らざるなり。思ふに、體面維持とは、不外聞を避くるの義にして、不外聞とは世間の風聞に傳へて面白からずとの意味ならんなれども、斯く無理なる散財をなし、無理なる借用をなして、鄕黨朋友の耳目を欺きながら、後日に至り、其の朋友に相談して哀れを乞ひ、借用の返濟を促されて申譯に窮するが如き、不外聞の大なるものならずや。元來富豪大家の人々が大いに散財して、間接直接に世の中を賑はすは、誠に願はしきことなれども、內實の小身者にてありながら、大家を學ばんとして學び得ざれば、則ち不外聞と稱し、世間の風聞如何を恐れて分外の無理を犯すが如きは、自信自重の大義を忘るゝものにして、風聞の奴隸と云ふべきのみ。

滔々たる凡俗世界を眺むるに、かの少年書生輩がとかく金錢を濫用して

人に厭はるゝは勿論、政府の官吏、若しくは實業界の紳士と稱する輩が、衣食住に關して儉約の道を忘れ、家計不取締の慘狀に陷りて、終に節を屈し、心にも思はぬことを行うて竊に不愉快を嘆ずるもの多きも、本はと云へば、人生獨立の實手段を等閑に附し、浮世の小不外聞を恐れて、一身の大不外聞を忘れたるが故のみ。斯くの如きは實に處世の勇氣に乏しき奴輩にして唾棄すべきなり。（福翁百話）

ブッカー・ワシントン

二　黑偉人

一　遊學

千八百七十二年の秋、十四歳――或は十五歳になつた私は、愈〻ラフナー夫人（Ruffner）の許を去つて、ハムブトン（Hampton）に行くことにした。母は甚しく私の鬱勃たる雄心に動かされたが、しかし、此の壯擧は徒勞に歸するだらうと大變な心配。兄は兄で、旅費の調達にあらん限りの力を盡してくれたが、炭坑内で働いた僅かの賃銀、而も其の大部分は生計の方に消費されてゐたから、固より大した金の出來る筈がない。

ブッカー・ワシントン Booker Washington (1858(9)―1915)
ラフナー夫人 ワシントンの雇はれてゐた將軍夫人

恰も此の時、最も私を感動させた事件が起つた。それは、多くの黑人達が、今回の私の決心に對して熱烈に同情し、自分達の生存中に、我々黑人の間から、遙に遊學の途に上るやうな賴母しい者が出ようとは夢にも思はなかつたと、涙を流さんばかりに喜んでくれたことである。彼等は喜び極つて、或は白銅貨、或は銀貨、或は手巾を私に贈つて、心からの餞（はなむけ）としてくれた。

ブッカー・ワシントン

到頭出發となつた。其の時、母はとかく健康が勝れなかつたので、再會は期し難いと思はれた。母も私も口にこそ何も言はないが、心の中では暗涙を飲んだ。けれども、母は甲斐々々しく立働いて、元氣よく私の首途（かどで）を送つてくれた。私は此の大旅行の荷物として、全財産たる僅かばかりの衣類を入れた安鞄（やすかばん）一箇を携へて鹿島立（かしまだち）した。

鹿島立　出立

モルデン(Malden)からハムプトンまでは約五百哩、其の大半は古ぼけた驛馬車で搖られて行かねばならなかつた。幾日も經たない中に、多くもない私の旅費は見る〳〵乏しくなつて來た。或日の夕暮、私達――黑人は私だけであつた――を乘せた驛馬車が、とある小旅館に着くと、他の客は直ちにそれぞれの室に案内されて、悠然と夕食に取掛らうとして居るのに、私ばかりは誰も相手にしてくれぬ。私は吹荒ぶ夕風に身を顫はして羞みながらおづおづと帳場の前に立つた。と、番頭は金の有無さへ聞かないで、食事も宿泊も頭から拒絶して了つた。私は覺えずほろりとなつた。皮膚の色の相違はこんな所にまで影響を及ぼすとは夢にも知らなかつた。仕方がないので、夜明まで無暗にそこらを歩き廻つて、やつと暖を取つた。

いよ〳〵旅費が全く盡きた。私は暗い心を抱きながら、とぼ〳〵と歩き續けた。たまには通り掛りの荷車や貨車に乘せて貰つたこともあつたが、辛うじてハムプトンから八十二哩此方のリッチモンド(Richmond)市まで辿り着いた時には、體は綿のやうに疲れ、垢に塗れ、腹はへと〳〵に空ききつてゐた。私は痛む足を引摺るやうにして、夜の町を彼方此方と歩き廻つた。けれども、無一文の黑人に宿を貸すやうなものが居る筈はない。その中に腹は益〻空いて來るし、體は愈〻疲れて來た。到る處のレストラント(Restaurant)では、堆く卓上に積まれてある雞のフライ(Fry)や半月形の林檎のパイ(Pie)が、甘味さうな匂で鼻を衝く。私はもう堪らなくなつて、若し今あの雞の脚一つか若しくは林檎のパイの一片を呉れるものがあつたら、未來に於て私が贏ち得る總べてのものを與へる約束をしても好いとまで思つた。

到頭一歩も動けなくなつた。丁度其の時、私は可なり高い板敷の人道に來掛つてゐたので、人通りの絶えるのを待つて、そつと其の下に這込み、私の全財産たる小鞄を枕として、死魚のやうに眼をつぶつた。

夜がほんのりと明けかゝつた頃、頭を擧げて四邊を見廻すと、驚いた、私は大きな汽船のすぐ傍に寢てゐた。其の船は銑鐵の荷卸をして居るらしかつたので、私はつか〳〵と歩み寄つて、船長に、食事の代を得たいから、荷卸の手傳をさせては呉れまいかと願つた。船長は親切にもすぐ私の願を聽入

れて吳れた。可なり長い間働いて、やつと朝飯にありついたが、今思うても、其の日の朝飯ほどの美味は、一生涯口にした覺えがない。

私の働きぶりはひどく船長の氣に入つたと見えて、「若し望みなら、仕事を續けて遣つてはどうか、少額ながら日給を與へるが。」と言つて吳れた。溺れるものは藁でも掴む。私は喜んで之に應じた。そして、リッチモンドの第一夜の宿を貸して吳れたあの人道の下を我が旅館とし、食事もなるべく經濟的なものを選んで、出來るだけ日給を餘すことに努めた。少しづつ溜つて行く金をじつと眺めて居ると、胸の中で「ハムプトン、ハムプトン。」と囁く聲が聞えるやうな氣がした。

頓て貯金はハムプトンまでの旅費に足るだけになつた。私は船長に好意を謝して、巣立つ小鳥のやうに喜び勇んで旅程に上つた。數日後、私は懷中餘すところの五十仙を抱いて、夢寐の間にも忘れないハムプトンに着いた。

嗚呼ハムプトン師範學校兼農學校は是か。私は頭を壓して聳えて居る巨大な煉瓦造の三層樓を仰いだ瞬間、今までに出遇つた有らゆる苦惱が一時に除かれ盡したやうな氣がした。そして、此の建物が今まで眼に觸れた最大最美のものに思はれた。校舍の一瞥は、私に全く新しい生命を吹込んだ。私の生涯は之によつて新たな意義を有するに至つた。見よ、永く我が念頭に絡み付いてゐた希望の地、――私に取つての至上の樂園が、正に其の現實の姿を私の眼前に展開して居るではないか。私は昂然として心に誓つた――「現世に於ける最善を成就する爲には、如何なる障礙も來らば來れ、悉く我が奮鬪・努力の前に屈伏させてやるぞ。」と。

私は直ちに校門を潛り、校長メリー・エフ・マッキー（Mary F. Mackie）女史の面前に出た。そして、相當の學級に編入されたいと願つた。何しろ長い苦しい旅のために、飽くまで汚れ窶れた蓬髪垢面の一少年の姿は、校長に好い第一印象を與へさうにもなかつた。私は校長の顏を仰ぎながら、胸をわく〳〵させてゐた。校長はじつと私を見詰めたまゝ、許すとも許さぬとも言はぬ。私ははらはらした。殊に他の子供達にはどし〳〵入學を許して居るのを見ると、私の

不安と不平は刻一刻と高じて來るばかりであつた。

數時間經つて、校長は突如として言つた。「隣の諳誦室を掃除しなくてはならぬ。まあ掃いて御覽」と。あゝ機會は來た。私は實に是ぐらゐ嬉しく思つたことはない。掃除にかけてはやかまし屋のラフナー夫人の下で鍛へられた此の腕だ。及第疑ないと踊躍して取掛つた。私は三度諳誦室の床を掃いて、四度雜巾を掛けた。それから、柱といはず、窓といはず、机から椅子まで、悉く四度づつ拭いた。室内の諸道具はすつかり取移して、棚も隅も殘る隈なく十分綺麗にし、そしてきちんと整理した。それは私の入學の許否が一に懸つて此の掃除の彼女に與へる印象如何にあると信じたからである。

果然、掃除が濟んだと聞いた彼女は、つか〳〵と室内に入つて來て、先づ床板と棚を點檢し、それから手巾で窓の戸や机椅子などを強く擦つた。そして、何處にも塵一つ殘つてゐないのを見ると、靜に口を開いて、「入學を許しませう。」と言つた。

此の刹那に於ける私は、地上に於ける最も幸福な者の一人であつた。諳誦室の掃除は卽ち私の入學試驗であつた。實に奇でまた珍妙な入學試驗！　而もハーヴァード(Harvard)やエール(Yale)大學の入學試驗に及第した如何なる青年でも、恐らく此の時の私以上に、心底からの滿足と喜悅とを感じ得たものはあるまい。

諳誦室掃除の手際を見て取つた校長は、すぐ私に教室掃除の仕事を與へた。これは頗る骨の折れる仕事ではあるが、私の在學費用の大部分を產み出してくれるので、私は喜んで其の任に當つた。

二　成業

千八百九十六年五月の或日曜日の朝であつた。私は妻子に取圍まれながら、タスケギー(Tuskegee)なる自分の家の緣側にゆつたりと腰を掛けてゐた。黑人教育のために日夜駈廻つて居る私には、日曜日だけが身體と靈魂との安息日であつた。だから、私は日曜日には何時も家中の者と一緒になつて、出來るだけのんびりと、出來るだけ淸く樂しく暮すことにして居る。で、此の日

も麗かな日の光を滿身に浴びながら、罪もない談話に子供達を笑はせたり眼を丸くさせたりしてゐた。妻は少し離れた處から、じつと其の樣子を眺めて、雙の頰に柔かな笑を浮べてゐた。氣持のいゝ風が靜に樹の葉を渡つて、私達の顏を撫でる。小鳥が朗かに囀つて、枝から枝へと飛移る。

ハーヴァード大學正門

總べてが長閑かで平和である。

此の時、突如として一封の大きな手紙が私の手に屆いた。差出人はハーヴァード大學總長エリオット博士(Eliot)である。私は頗る不審に思ひながら封を切つた。すると、實に思ひがけない文字が私の眼の前に躍り出た。曰く、「謹啓。來る學位授與式に際し、我がハーヴァード大學は、貴殿に對して學位を授與仕度候。但し、我が校の慣例として、受位者は自身出頭のことに相成居候。式は六月二十四日學行仕る筈に付、當日午前九時までに御來校相成度願上候。尙御來校の有無御一報被下度候。敬具。」

手紙を持つて居る私の手は微に顫へた。アメリカ(America)に於て最も古い歷史を有し、また最も著しい名聲を有するハーヴァード大學から、學位を授かるなどといふ名譽が、私の頭上に落ちて來ようとは、何としても私には信じられなかつた。緣側に腰掛けたまゝ、私は雙眼からはら〳〵と涙をこぼした。

私の心中には樣々の思が旋風のやうに渦卷返した。

あゝ私の半生——幼時の悲慘な奴隸生活、顏も手足も眞黑にして働き續けた暗黑な炭坑、他人の食べて居る一片の生姜糖(しやうがたう)に涎を垂らした程の貧しい食物、宿るに家がなくて、大道の片隅に犬のやうに丸く眠つたハムプトンへの旅路、そして又、ABCさへ讀めないで「I8」と云ふ數字が解つたといつて小躍りした少年時代を持つて居る私は、今や世界有數の大學から學位を授かるのである。私に取つては、眞に空前の名譽であると言はねばならない。

私は靜に此の由を妻に告げた。妻の顏は忽ち華やかな笑に輝きわたつた。

子供達も能く解らないながらも急に嬉しさうに噪ぎ出した。眞に樂しく麗かな日曜日であつた。

遂に六月二十四日は來た。私はハーヴァード大學に出頭し、總長エリオット博士や其の他の人々に擁せられて、式場に當てられたサンダース劇場に入つた。今回學位を授かるのは、私の外にネルソン・エー・マイルス將軍、ベル電話の發明者ベル博士、ヴィンセント僧正、マイノット・ジェー・サヴェージ卿達であつた。

私達一行は嚴肅な列をなして、靜々と式場へ歩いて行つた。先づ物々しい帽子を戴き、ゆつたりしたガウンを纏うた多くの教授や役員とともに、總長が悠然として歩く。總長の傍には、槍騎兵に護衛されたマサチュセッツの知事が並んで居る。私達一行は感慨に滿ちた顔をして、總長のすぐ後に續いた。

劇場へ入ると、式は直ちに始つた。名譽學位授與式は、同大學では最も人人の興味をそゝる行事である。何故かといふに、何人が名譽の學位を授かるかといふことは、式が始るまでは祕密にしてある。從つて其處に居並ぶ人々の心には、胸をそゝるやうな一種の期待心と好奇心とが湧返つて居る。だから、愈〻この名譽を荷ふ人が姿を現すと、學生その他の參列員の口からは、一齊に喝采の聲が迸る。そして、式の進むにつれて、滿堂の人心は次第に興奮し熱しきつて來る。

遂に私の名が呼上げられた。私は我ながら面はゆげに立上つた。總長は直ちに口を開いて、美しい、そして力の籠つた英語で、私にマスター・オヴァーツの學位を授けられた。此の時、喝采の聲は急霰のやうに降注いだ。其の喝采は決して形式的のものではなかつた、ぎごちないこはばつたものでもなかつた、また同情や慰藉の聲でもなかつた、全く熱情と讃嘆との念から自然に迸り出た誠の聲であつた。喝采の聲が一度役員の間に起ると、それが忽ち大浪のやうに土間から桟敷に廣がつて、人々の頰は盡く紅く輝いた。一奴隷から身を起して、惡戰苦鬪、黑人の爲に成遂げた私の事業を、心の眞底から嘆賞する思が自ら外に現れたのである。場内に響を返す喝采の中に、

自分の常に歸つた私の顏は、恐らく著しく緊張してゐたであらう。私自身にも雙の頰が微に顫へて居るのが能く解つた。

式後、私達はまた列を造つて記念館に練つて行つた。途中到る處で、人々は私達の名を呼び、ハーヴァード大學萬歲を浴びせ掛けた。記念館に着くと、頓て卒業生晩餐會が開かれた。一種特別な、ハーヴァードの香とでも言ふべき熱氣――大學自慢と大學愛敬の燃えるやうな熱氣を持つて居る千餘名の卒業生は、心の底から私達を迎へた。そして、總長や知事の演說の後で、到頭私を指名して一場の演說をさせた。

ニューイングランド(New England)の大學が、黑人に名譽の學位を授けたのは是が初めてであつたので、國中の新聞は筆を揃へて樣々の報道と批評とを書立てた。其の中で、ボストン(Boston)紙の社說が、「ハーヴァード大學がタスケギー校長に對しマスターオヴアーツの學位を授與したことは、之を受けたものの名譽は固より、之を授けた大學そのものも亦名譽と言はなければならぬ。ワシントン敎授が敎育のため、善良な市民のため、將又南部地方に擇んだ勞働の原野の開發のために成就した事業に至つては、我が國家の恩人の列に加へるべき十分の價がある。（中略）此の學位は、彼が黑人であり奴隸であつたから授けられたのでなく、實に南部黑人地帶の人々の向上の爲に盡した事業によつて、大人物と仰がれるのに足る天才と宏量とを示したからである。」と言つたのは、あまり過分な褒詞で、少からず恥入る次第であるが、併し、私の眞心と事業の性質とを能く理解して居る點に於ては、眞に有難く感謝する次第である。（黑偉人）

三　一夜の神興

時に君、古い本だが、「五重塔」は讀みましたかね。まだ？　では一度お讀みなさい。僕の本を貸しますから、是非お讀みなさい。これは僕の愛讀書です。

え、僕の愛讀書ですか。それは澤山あります。此の書齋に在る本は皆僕の愛讀書です。そちらの方から、書齋獨語・卽興詩人・何處へ行く・新春・近松・馬

琴・源氏・平家・歌はぬ人・鶉籠・猫・明治文學史・國文學史十講・生の實現・愛之學校・一葉全集・不如歸・唐宋詩醇・白氏文集……何でも此處の本箱に在る本は皆僕の愛讀書ですが、中でも、此の「五重塔」は最も僕の愛好する書物の一種です。御覽なさい、此の通りに赤や青で圈點が打つてありませう。こんなに圈點を打つた本は、學生時代のノート(Note)の外には餘り類がありません。いや、今一種あります、それは一葉全集の「十三夜」です。それには此の通り殆ど空地なしに朱點を打つて、其の上目次の所に一〇〇と點が附けてあります。私が讀んだ古い小說の中では、「十三夜」と「五重塔」と紅葉の「多情多恨」が、百點又は百點に近い點です。「たけくらべ」？　お待ち下さい、「たけくらべ」は八〇とあります。「たけくらべ」よりも「大つごもり」や「この子」の方が高點です。勿論人々の好き嫌ひもありますし、又同じ人でも時によつて採點の標準は違ひますが、それでも、僕には「十三夜」と「五重塔」は、今日深い印象を留めて居ります。

餘事はさておき、「五重塔」は是非一度お讀みなさい。故東京府知事井上友一博士は此の小說の熱愛家で、嘗て同博士の斡旋で、之を芝居に仕組ませて、

露伴
幸田成行、東京市の人、慶應三年生、文學者、文學博士

東京の某劇場で演じさせられた筈です。劇としての價値は左程大したものではなかつたかも知れませんが、讀物としての價値は、明治・大正を通じての傑作の一つに數ふべきものと思ひます。

君、文體は違つてゐますよ。同じ露伴物の中でも、これは格別に古い方ですから、今日流行の小說とは非常に文體は違つてゐますよ。併し、文體の如きは抑〻末です。「ぞる、こそれ」で書いてあつても、源氏物語は矢張千古の傑作ですからね。

え、著者に面會したことがあるかといふお尋ねですか。ありますとも、何度でもあります。露伴さんは謂はば布袋さん……いや、達磨さん見たやうな方です。斯うどしんと爐を切つた座敷の爐の前に坐つて、ねつちりねつちり話されるところは、まるで禪坊さんです。恐しい凝性(こりしやう)の方で、此の小說を書かれる時には、――人傳(ひとづて)に聞いたのですが、東京附近の五重の塔を見廻つて、幾枚も〳〵、机の抽斗(ひきだし)一杯ほどの圖面を集めて、それでも滿足が出來ず、とう〳〵大工に模型を作つて貰はれたといふことです。さうかも知れ

ません。本文の中に大工の十兵衞が、

「其の夜からといふものは、眞實、眞實でござりまする、御上人樣、晴れて居る空を見ても、燈光のとゞかぬ室の隅の暗いところを見ても、白木造の五重の塔がぬつと突立つて見おろして居りまするは。とう〳〵自分が造りたい氣になつて、とても及ばぬとは知りながら、毎日仕事を終るとすぐに、夜を籠めて、五十分の一の雛形をつくり、昨夜で丁度仕上げました。見に來て下され、御上人樣。」

といふ所がありますが、それは其のまゝ著者露伴さんの熱誠と見ることが出來ます。或日、話の序に、僕が「天うつ浪」の出處に就いて尋ねましたら、露伴さんは、奥の方から一抱への風呂敷包を持つて來られて、「これが其の資料ですがね。」と云つて、僕に示された其の資料！僕は思はず大家の苦心に感激の聲を發しました。

まだ露伴さんが谷中に住んで居られた時のことださうです。朝夕五重の塔を見て、天晴立派に建つたものかな、あら快き細工振りかな。稀有ぢや、未曾有ぢやと、朝日・夕日に感嘆されてゐたさうですが、或年、非常な暴風雨がありました。翌朝、今朝こそ、若しや……と走り出て五重の塔を見られたさうです。ところが、依然として、いや巍然として、金剛力士が魔軍を睥睨して十六丈の姿を現じ、坤軸動かず、足ぶみして巖上に突立ちたるごとく、釘一本ゆるがず、板一枚剝がれず突立つてゐたさうです。こゝに露伴さんは感奮して、是非此の五重の塔の由來を書いて見ようと決心して、それから前に申したやうに材料蒐集に苦心して、百五十頁足らずの「五重塔」に一箇年餘を費されたといふことです。

ところが君、面白いことがありますよ。本文の中に暴風雨の記事があります。一寸其の本を貸して見給へ、……此處です。「其の三十三」です。「長夜の夢をさまされて、江戸四里四方の老若男女、惡風來たりと驚き騷ぎ。」以下です。飛天夜叉王が數萬の眷屬を指揮して暴威を逞しくする、實に凄慘極る、鬼氣人に逼る名文は、露伴さんが、一夜の中に書かれたのださうです。彼の遲筆……と云はれてゐる露伴さんが、これ程の名文を一夜の中に書かれたとい

ふのは誠に驚嘆すべき事實で、蓋し神興――「不斷の努力」・「愛の力」の結晶ともいふべき靈感、卽ちインスピレーション Inspiration に依つて筆を運ばれたのであらうと想像します。

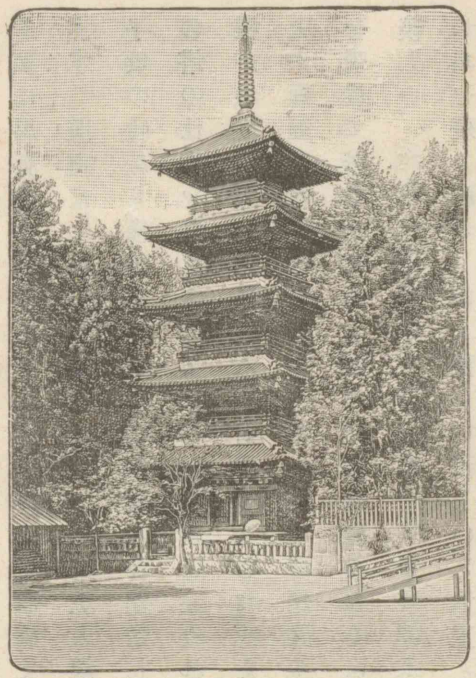
四　五重の塔

幸田露伴

「五重の塔のお願に出ましたは、五重の塔のためでございます。」と、藪から棒を突出したやうに尻もつたてて、聲の調子も不揃に、辛くも胸にあることを、額やら腋の下の汗と共に絞り出せば、上人思はず笑を催され、「何か知らねど、老衲をば怖いものなぞと思はず、遠慮を忘れてゆつくりと話をするがよい。庫裡の土間に坐り込うで動かずにゐた樣子では、何か深う思ひ詰めて來たことであらう。さあ、遠慮を捨てて、急かずに、老衲をば朋友同樣に思うて話すがよい。」と、飽くまで優しき注意。十兵衞脆くも梟と常々惡口を受ける銅鈴眼にはや涙を浮めて、「はい、はい、はい、有難うございまする。思ひ詰めて參りました。其の五重の塔を、斯ういふ野耶でございます、御覽の通り、のつそり十兵衞と口惜しい綽名を付けられて居る奴でございまする。併し、御上人樣、眞實でございまする。仕事は下手ではございません。知つて居ります、私は馬鹿でございます、馬鹿にされて居ります、意氣地のない奴でございます。虛誕はなか〳〵申しません。御上人樣、大工は出來ます。大隅流は子供の時から、後藤・立川二つの流儀も合點致して居りまする。させて、五重の塔の仕事を私にさせていたゞきたい。それで參りました。川越の源太樣が積りをしたとは、五六日前聞きました。それから私は寢ませんは。御上人樣、五重の塔は百年に一度、一生に一度建つものではございません。恩を受けて居ります源太樣の仕事を取りたくは思ひませんが、あゝ賢い人は羨しい。一生一度、百年一度の好い仕事を源太樣はされる。死んでも立派に名を殘される。あゝ羨しい、羨しい。大工となつて生きて居る甲斐もあられるといふもの。それに引換へ、此の十兵衞は鑿・手斧もつては、源太樣にだとて誰にだとて、萬が一にもおくれを取るやうなことは必ず〳〵ないと思へど、年が年中、長屋の羽目板の繕ひやら、馬小屋・箱溝の數仕事、天道樣が智

庫裡　寺院の臺所

慧といふものを私には下さらないゆゑ、仕方がないと諦めても〳〵拙い奴等が宮を作り堂を受負ひ、見るものの眼から見れば、建てさせた人が氣の毒なほどのものを拵へたのを見る度毎に内々自分の不運を泣きますは。御上人樣、時々は口惜しく、技倆もない癖に智慧ばかり達者な奴が憎くもなりまするは、御上人樣。源太樣は羨しい、智慧も達者なれば手腕も達者、あゝ羨しい仕事をなされるか。私はよ、源太樣はよ、情ない此の私はよと、羨しいがつい高じて、女房にも口きかず、泣きながら寢ました其の夜のこと、『五重の塔を汝作れ、今すぐ作れ。』と、怖しい人に吩咐けられ、狼狽へて飛起きさまに道具箱へ手を突込んだは、半分夢



で半分現。眼が全く覺めて見ますれば、指の先を鐔鑿につゝかけて、怪我をしながら道具箱につかまつて、何時の間にか夜具の中から出てゐたつまらなさ。行燈の前につくねんと坐つて、嗚呼情ない詰らないと思ひました其の心持、御上人樣、解りまするか。えゝ、解りまするか。これだけが誰にでも解つて呉れゝば、塔を建てなくてもよいのです。どうせ馬鹿なのつそり十兵衞は死んでもよいのでござりまする。腰拔鋸のやうに生きてゐたくもないのですは。其の夜からといふものは、眞實、眞實でござりまする、御上人樣。晴れて居る空を見ても、燈火の屆かぬ室の暗い處を見ても、白木造の五重の塔がぬつと突立つて、私を見下して居りまするは。とう〳〵自分が造りたい氣になつてとても及ばぬとは知りながら、毎日仕事を終るとすぐに、夜を籠めて五十分の一の雛形を造り、昨夜で丁度仕上げました。見に來て下され、御上人樣。賴まれもせぬ仕事は出來て、仕たい仕事は出來ない口惜しさ。えゝ不運ほど情ないものはないと、私が歎けば、御上人樣、『なまじ出來ずば不運も知るまい。』と、女房めが其の雛形をば搖りうごかしての述懷、無理

とは聞えぬだけに餘計泣きました。御上人樣、御慈悲に、今度の五重の塔は私に建てさせて下され、拜みます。こゝ此の通り。」と、兩手を合はせて、頭を疊に、涙は塵を浮べたり。（五重塔）

五　自警八則

一

憤一字、是進學機關舜何人也、予何人也。方是憤。

「憤」は憤發の憤です。「何糞！」と心にいきどほるのです。他人の頭を撲つのは「怒」で、自分で自分の意氣地なさに齒軋するのが卽ち「憤」です。

「憤の一字はこれ進學の機關なり。」とは、實にうまく言つたもので、汽車の機關車も「何を！是ぐらゐの重荷が何だい！ふん、ふん〳〵！」と憤發して、踏張つて居るのです。

舜は、日本で申せば民間から出て位人臣を極めた豐臣秀吉にも比すべき支那太古の偉人です。

奴凧雲の上まで昇りけり

草履取から經上つた太閤さんも、「憤」の一字で出世したのです。せめては馬一疋の主人となりたい！　武士たる以上、せめて丹羽長秀か柴田勝家ほどの武士になりたい！　日本一の——朝鮮までも——大明國までも——と、斯うして、階一階、級一級、遂に雷名を天下に轟かせるに至つたのです。

二

涉世之道、在得失二字。勿得不可得。勿失不可失。如此而已。

名譽は得よ、虛名は博する勿れ。勝利は得よ、不正の勝利は蛇蝎の如く厭へ。一刻も失うてはならぬのは卽ち世間の信用です。

三

取信於人、則財無不足。

「あてになる人となれ。」世に是程手近な而も是程大切な敎訓がありませうか。「信ずれば則ち人任ず。」敢て、就職難など取越苦勞する必要はありません。約束を守るのも、時間を勵行するのも、返信を怠らぬのも、皆「信を人に取

る」の練習ですが、何より吾人に肝要な事件は金錢上の問題です。學資の途を明にせよ、これ諸子が諸子の父兄に信を取る所以で、やがては諸子が國家の要路に立つて社會に信を取る要諦です。汁粉一椀の價も、氷水一杯の値段も、借りたのは返せ、奢られたのは謝せよ。有耶無耶の裡、曖昧模糊に葬り去るのは破廉恥の極と申さなければなりません。

佐藤一齋

一齋　佐藤氏、名は坦、德川幕府の儒官、安政六年（一八五九）歿年八十八

四

能慎寢食孝也。

一見平凡のやうで而も意味深長な教訓です。昔、孟武伯が孝を問うた所、孔子は「父母は唯其の疾をこれ憂ふ。」と答へた。瞬時も兩親の念頭を去らぬのは遊子の健康如何であります。能く睡眠と飲食とに注意するのは何より の孝行です。八十有八歳までの長壽を保つた一齋の言に、「養生の工夫は節の一字にあり。」とあります。「節」は程好いこと、卽ち「慎」と同義です。俚諺に「寢るも奉公。」とあります。能く寢て頭腦の明晰を贏ち得べきです。

五

我當視人之長處勿視人之短處視短處則我勝彼於我無益視長處則彼勝我於我有益。

一言の加へるべきものがありません。只管實踐躬行すべきです。

六

夢寐不能自欺。

「夢寐」とは夢のことです。夢は決して自分を欺くことが出來ぬとの謂です。晝間徒に大膽を粧うても駄目です。卑怯な夢が夜間は我を裏切ります。

一齋は德川時代の儒者中最も修養に志した所謂篤行の君子人で、其の書中に、夢に因つて自ら警めたらしい文章が數多見えます。例へば、

「人を知るは難うして易く、自ら知るは易うして難し。但し之を夢寐に徵すれば以て知るべし。」

又は、

「意の誠否は須らく夢寐中のことに於て之を驗すべし。」

又は、

「凡そ人心の裏、絶無のことは夢寐に形造らず。昔人謂へるあり、『男は子を産むを夢みず、女は妻を娶るを夢みず。』と。此の言や良に然り。」

など、いづれも微妙な心理作用に留意して、修養の補助としたものです。諸子も試に夜毎の夢を驗して見給へ。必ずや背に汗するものがありませう。人知らぬ自警の好資料とも申すべきです。

七

悔昨非者有之改今過者鮮矣。

論語に謂はゆる「過つては改むるに憚ること勿れ。」と同一の教訓です。「過つて改めざる、之を過と謂ふ。」と、孔夫子は重ねて論語に教へてゐます。人聖人にあらず、誰か過なからんやです。で、過と知つたら即座に之を改めるべきです。然るに、「今の過を改むる者は鮮し矣。」と、論語に力強く斷言してあるやうに、實際は甚しい難事です、意志の力を要します。故に、左傳には、「過つて能く改むる、善これより大いなるは莫し。」と、盛に之を奬勵してある位です。

「五十にして四十九年の非を知る。」是ぞ人格の發展です、人類の向上です。非を知つたら立所に改めよ。「懺悔には十罪を滅す。」と佛書にも見えてゐます。非を文るのは小人のこと、人類の屑のする小刀細工です。堂々たる男子は當に藺相如に對した廉頗のやうにあつて然るべきです。

八

少而學則壯而有爲。壯而學則老而不衰。老而學則死而不朽。

學問は人間一生涯の事業です。當に孳々乞々以て死後の名を成すべきです。が、格別に「少壯者は時に及んで勉强以て大業をなし、遲暮の嘆あることなかれ。」です。「朝に食はざれば則ち晝に餓う。少にして學ばざれば則ち壯にして惑ふ。人生二十、方に出づる日の如し。」此の元氣旺盛の時に、語學にまれ、數學にまれ、文にまれ、武にまれ、盛に學び盛に鍛へるべきです。

諸子幸に自重し給へ！

小藥是草根木皮、大藥是飲食衣服、藥原是治心修身。（言志錄）
士也毋空應有萬代爾語續可名者不立之而（萬葉集）

里見弴
本名山内英夫
東京市の人、明治二十一年生、文學者

存外
思の外

六　峠越

里見弴

道は針葉樹の密林に入つていつた。息をとつていかれさうだつた風は、そこで急に凪ぎでもしたやうに遮られたが、雪はまだ落ちて來た。低くも三丈以上の木々が、がつしりと枝を組み葉を重ねて、舊い農家の廣々ととつた土間に立つて、眞黑に煤けた屋根裏でも仰いだやうに、厚ぼつたく天を隱して、そこでは雪さへも暗い腹を見せてゐた。それでゐて、どこからともなく粉雪がばら〳〵と落續けた。吹晒しとは比べものにならないほど薄暗くはあつたが、大地ももとより雪に覆はれてゐた。でも、喬木の根方などには、少しばかり黑い土の色に隈どられてゐるところもあつて、どうかすると、存外生々とした草が顏を出したりしてゐた。この林間の薄暗い道が、山の腹をだら〳〵登りに、かなり長く續いた。

ふと、どこか下の方で水の音が聞え出した。で、旅人は、Hといふ炭燒の村に近づいたことを知つた。朝の七時からその時刻まで――その時刻といふのは午近く、或はもう少し廻つてゐるかも知れない。とにかく彼の腹はさう知らせてゐる。――雪の中を、やつとずほり〳〵とこいで來た彼は、思はずほつと一息ついた。

旅人は、兵隊の外套――カーキ色（Khaki）ならない以前の、黑いやつを着てゐる。釦（ボタン）は黑いのと取換へてあるが、袖には赤い筋が卷かれたまゝになつてゐる。外套（Burton）の下に、小さな風呂敷包でも帶の上から背負つてゐると見えて、尻のところがぶつくりと脹らんでゐるし、前の衣嚢にも何か入れてあるかして、下廣がりに、恰好の惡い空瓶に足が生えて歩き出したやうだ。外套についてゐる頭巾を劍先鰯の形に突立てて、顏といつては、寒さに赤くなつた鼻の先がちつとばかり覗いてゐるだけだ。足の堅めはいふまでもなく雪沓だが、林に入つてからつぼめて杖についてゐる洋傘が白張で、ところ〴〵に赤い汚點のやうなものが見える。……尤も白張といふのは出來た當時のことで、古

劍先鰯
鰯の頭部が劍の尖端のやうに菱形をしてゐるのをいふ

びて鼠色になつてはゐるが。……

旅人は足をとめて、その不思議な洋傘を前に立て、甲の方がしやこ〳〵な玉羅紗で、腹に茶革を縫合はせた時代物の手袋の兩手をぐたりと柄に重ねて、白く長く息を吐いた。莫大小の襟卷に息が玉になつてゐて、惡暖く頰をくしや〳〵刺す。手袋のまゝ額を一つぶるんと撫廻して、序にほつそりと瘦尖つた頤を襟卷の外に出した。汗ばんだ喉に冷たい大氣が快い。鼻の奥が、あんまり早く氷水をかつこんだ時のやうに、つうんと痛んで、何か眉間へ拔けさうな氣がする。たゞ膝から下には殆ど感覺がない。……風が林の上を渡つていくと見えて、時々木々がぎゆつ〳〵と軋んで鳴る。どこか見えない下の方で激流が岩に噎んでゐる……寂かだ。

旅人はまた歩き出した。たゞ何がなし退屈な道だつた。永久に左右の足を前に動かしつゞける動物でもあるかのやうに、彼はなんにも思はずに歩いて行つた。……雪の重みでかなり太い枝が折れてゐるところがあつた。新しい雪が堆く行手の道を塞いでゐる。葉末を雪に抑へられた枝は、

眉間　眉と眉との間
激流　はげしい流

裂けた口に蒼白い地肌を露して、まだ十分跳ねあがる力を籠めたまゝ凝と静まつてゐた。旅人はその姿勢に一寸心を惹かれた。雪を押退けてやらうかとさへ思つたが、あまり夥しいので、よして、その上を踏越えて進んだ。……やがて林を出はづれた。雪はまだ盛に降つてゐたが山懷に入つたせゐか、風は死んだやうに落ちてゐた。旅人は洋傘を擴げた。赤く筆太に、越中富山千金丹本家何の某と現した文字が見る〳〵雪に覆はれていつた。重くなると、つぼめたり擴げたり、ばた〳〵二三度煽つて、また越中富山千金丹本家何の某になる。黑い恰好の惡い空瓶が、鼠色の傘をさして、そこに赤い文字を現したり消したりしながら、もぐ〳〵と膝きりの雪をこいでいく。あとはたゞ一色に白い。

ほの〳〵と一筋、灰色の煙が山の腹を匍ひ騰つていく。……やがて家が見えた。旅人の舊い記憶ではそこらに五六軒家がかたまつてゐたやうだが、見ればぽつりと一軒になつてゐる、學校だ。

下りになつて、一度その家が見えなくなつた。捗らない道が急にもどか

山懷　山の中の丁度ふところのやうにこもつた地
煽る　動かしひろがへす

しく思はれ出して、旅人は幾度か仰いで煙を見た。急な坂を登りきると、先刻見えてゐたのとはまるで反對の側面へ、ひよつこりと立つてゐた。

板敷を跳び廻る音、嘻々といふ子供の叫び聲が外まで洩れて來た。子供の顔が五つ六つ好奇らしく硝子窓に押付けられてゐるのも見えた。それは今朝宿を出てから初めて見る人の顔であつた。……

道は山の腹をうねりうねつて段々高く登つて、いつしか峠の絶頂へ來た。左と右の足を代りばんこに前へ動かす運動の、力の量に或變りが感じられた。下りになつて樂になつたのだ。しかし、變つたといふことが旅人をそこに立止まらせた。

足もとから、雪のためにふつくらと滑かにされてゐる、ほどよい勾配の斷崖が、何千丈とも知れない谿間へと走つてゐる。白い泡を嚙んで、山水がその底を落ちて行く。が、耳を澄しても、微かな音さへ聞きわけられないほどに遙に下だ。彼方の連山がその谿間に鼻を突込んでゐる。鋸を並べたやうな杉が、山の足から中腹まですく〳〵と立並んでゐる。

斷崖　きりぎし

旅人は燐寸（Matsch）よりも短く見えるその杉林のあたりを見下してゐたが、白張の洋傘を突支棒にふとそこに蹲んだ。

空腹が感じられた。衣嚢に手を入れて見ると、左にいつの食ひ餘しか、こちこちになつた腰高饅頭が一つ轉げてゐた。彼はそれを食つた。うまくないと思つた。捨てた。ぱつと粉雪が立つと、それはころ〳〵と傾斜を轉げ始めた。一筋雪煙をあげて、彈みをうつて落ちて行く。……が、忽ち見えなくなつてしまつた。（毒輩）

腰高饅頭　扁平でなく丈の方が高いやうな形に作られた饅頭

傾斜　かたむき

島木赤彥　本名久保田俊彥

七　春の日

春の日のゆふべさすがに風ありて芝生にゆらぐ鞦韆の影　佐々木信綱

天と水の光の中に立ちて居る我が影ばかり寂しきは無し　島木赤彥

齋藤茂吉

うら〳〵と天に雲雀の啼きのぼり雪まだらなる山に雲居ず

窪田空穗
名は通治

大海の底に沈みて靜かにも耳を澄して居る貝の有るべし

木下利玄

空の藍山の黃色のくつきりとかたみにせめぎ秋晴に立つ

前田夕暮
名は洋三

泣き〳〵て疲れ果てたる人に似る海は夕日に凪ぎぬ靜に

與謝野鐵幹
名は寛

雲裂けて入日は海に漏れにけり赤きに浮び浪の立つ見ゆ

吉井勇

若うどは昨日は昨日今日は今日其の日〳〵に生くと雖も

現代實業國語讀本　卷五　終

常用漢字及略字

（臨時國語調査會決定）

（一）常用漢字（千九百六十二字）

【一】一丁七丈三上下不世丙並【丨】中【丶】丸主【ノ】久乏乘【乙】乙九乞也乳亂【亅】了事【二】二云互五井【亠】亡交京亭【人】人仁仇今介仕他付仙代令以仰仲件任企伊伏伐休伯伴伺似但位低住佐何余佛作使來例侍供依侮俟侵便係促俊俗保俠信修俳俵俸倂倉個倍倒候借倫假偉偏停健側偶傍傑備催働傳債傷傾僅像僚僞僧價儀億儉儒償優【儿】元兄充兆兇先光兌免兒兎【入】入內全兩【八】八公六共兵具典兼【冂】冊再【冖】冠【冫】冬冷凉凖凌凍凝【几】凡【凵】凶凸凹出【刀】刀刃分切刈刊刑列初判別利到制刷券刺刻則削前剛副割創劇劍劑【力】力功加劣助努効勅勇勉動勘務勝勞募勢勤勳勵勸【勹】勺匁包【匕】化北【匚】匹區【十】十千升午半卑卒卓協南博【卜】占【卩】印危却卵卷卽卿【厂】厄厘厚原【厶】去參【又】及友反叔取受叛【口】口古句叫召可叱史右司各合吉同名后吏吐向君呑吟否含呈吸吹告周味呼命和咽哀品員哲唐唱商問啓善喉喜喪單嗣嘉嘗器噴嚴囑【囗】囚四回因困固國圍園圓圖團【土】土在地坂均坊坐坑坪垂型垣埋城域執培基堀堂堅堤堪報場塔塗塚塵境墓墜增墨墮壁壇壓壞【士】士壯壹壽【夂】夏【夕】夕外多夜夢【大】大天太夫央失奇奉奏契奔奢奥奪奬奮【女】女奴好如妃妊妙妨妹妻妾姉始姑姓委姦姪姫姻姿威娘娯娠婚婦婿媒嫁嫉嫡嫌孃【子】子字存孝季孤孫學【宀】宅宇守安完宗官定宛宜客宣室宮宰害宴家容宿寄密富寒察寡寢實審寫寛寶【寸】寸寺封射將專尉尊尋對導【小】小少尙【尢】就【尸】尺尼尾尿局居屆屈屋展層履屬【山】山岡岩岬岳岸峠峯島峽崇崎崩嶮【巛】川州巡巣【工】工左巧巨差【己】己【巾】市布帆希帖帝帥師席帳帶常帽幅幕幣【干】干平年幸幹【幺】幻幼幾【广】床序底店府度座庫庭庶康廉廊廟廢廣廳【廴】延廷建廻【廾】弄弊【弋】式【弓】弓弔引弘弟弱張强

彈【彡】形彩彫影【彳】役
彼往征待律後徐徑徒得
從御復循徽徵德徹【心】
心必忌忍志忘忙忠快念
忽怒思怠急性怨怪怯恐
恥恨恩恭息悅悔悟患悲
悼情惑惜惠惡惰惱想愁
愉意愚愛感慈態慕慘慢
慣慨慮慰慶慾憂憐憚憲
憶憾憤懇應懲懷懸戀
【戈】成 我戒 戚 戰 戲 戴
【戶】戶戾房所【手】手才
打托扱扶批承技抑投抗
折抱抵押抽拂拍拒拓拔
拘拙招拜括拳拾持指振
捌捕捧捨掃授掌排掘掛
採探控推接提揚換握揭
揮援損搖搜摘携摩撫擇
擊操擔據擬擴攝【支】支
【攴】收改攻放政故敎敍

敎敏救敗敢散敬敵敷數
整【文】文【斗】斗料斜
【斤】斤斥斬新斷【方】方
施旅旋族旗【无】既【日】
日旦旨早旬旭昇昌明易
昔星春昨是時晚晝普景
晴晶智暇暖暗暑暮暴曆
曇曜【曰】曲更書曹曾替
最會【月】月有朋服朕朗
望朝期【木】木未末本札
朱机朽杉李材村杖束柿
杯東松板枕林枚果枝枯
架柄某染柔査柩柱柳栗
校株根格栽桃案桐桑桶
梅條梨梯械棄棋棒棚棟
森棺植楠業極榮構概樂
樋樓標樞模樣樹橋機横
檄檜檢櫻欄權【欠】次欲
款欺歌歎歐歡【止】止正
此步武歲歷歸【歹】死歿

殊殉殖殘【殳】段殺殼殿
毀【毋】母每毒【比】比
【毛】毛毫【氏】氏民【气】
氣【水】水氷永汁求汗汚
江池決汽沈沒沖沙河沸
油治沼沿況泉泊法波泣
泥注泰泳洋洗津洪洲活
派流浦浪浮浴海浸消涉
液淑涙淡淨淫深混清淺
添減渡溫測港渴游湖湧
湯源準溝溢溶溺滅滋滑
滯滴滿漁漂漆漏演漕漠
漢漫漸潔潛潮澤激濁濃
濕濟濫濱瀧灌灣【火】火
灰災炊炎炭烈烏無焰然
煉煎煮煙煤照煩熊熟熱
燃燈燒營燭爆爐【爪】爪
爭爲爵【父】父【片】片版
牌牒【牙】牙【牛】牛牧物
牲特犧【犬】犬犯狀狂狐

狩狹狼猛猫猶猿獄獨獲
獵獸獻【玄】玄率【玉】玉
玉玩珍珠班現球理琴
【瓜】瓜【瓦】瓦瓶【甘】甘
甚【生】生產甥【用】用
【田】田由甲申男町界畏
畑畔畜畝略番畫異畳當
疊【疋】疋疎疏疑【疒】疫
疲疾病症痕痘痛痢療
【癶】登發【白】白百的皆
皇【皮】皮【皿】皿盆益盛
盜盟盡監盤【目】目盲直
相省眉看眞眠眺眼着睡
督睦瞭【矢】矢知短【石】
石砂砲破研硬硯碁碎碑
確磁磨礎【示】示社祈祕
祖祝神票祭禁禍福禦禮
【禾】秀私秋科秒租秤秩
移税程稚種稱稻稼稿穀
積穗穩【穴】穴究空穿突

窃窒窓窮【立】立章童端
競【竹】竹竿笑笛笠符第
筆等筋筒答策箇算管篇
箱節範築篤簡簿籍【米】
米粉粒粘粗粟粹精糖糞
【糸】系紀約紅紋納純紗
紙級紛素紡索紫累細紳
紹紺終組結絶絞絡給統
絲絹經綠維綱網綴綻綿
緊緒線締緣編緩緯練縛
縣縫縮縱總績繁織繕繪
繭繰繼纂續【缶】缺【网】
罪置署罰罵罷羅【羊】羊
美羣義【羽】羽翁翌習翼
【老】老考者【而】耐【耒】
耕【耳】耳耽聖聘聞聯聲
職聽【肉】肉肋肖肝股肥
肩肯育肴肺胃背胎胞胴
胸能脂脇脈脊脚脫腎腐
腕腦腰腸腹腺膏膚膜膝

膳膽臆臟【臣】臣臥臨
【自】自臭【至】至致臺
【臼】臼與舅興舉舊【舌】
舌舎【舛】舞【舟】舟航般
舵舶船艇艘艦【艮】良
【色】色【艸】芋芝花芽芳
苑苗若苦英茂茶草荒荷
莊莖菊菌菓菜華萩萬落
葉著葬蒔蒙蒸蓄蓮蔓蔭
薄薦薪藍藏藝藤藥蘇
【虍】虎虐處虛虜號【虫】
蚊蛇蛙蜂蜜融蟲蠶蠻
【血】血衆【行】行術街衝
衡衞【衣】衣表衰袂袋袖
被袴裁裂裏裕補裝裸製
複褒【襾】西要覆【見】見
規視親覺覽觀【角】角解
觸【言】言訂計討訓託記
訟訪設許訴診詐詔評詞
詠詣試詩詰話詳誅誇誌

認誓誕誘語誠誤誦說課
誼調談請諒論諫諭諸諾
謀謁謂謙講謝謠謹證識
譜警譯議護譽讀變讓
【谷】谷【豆】豆豊【豕】豚
象豪豫【貝】貝貞負財貢
貧貨販貫責貯貳貴買貸
費貿賀賃賄資賊賑賓賜
賞賢賣賤賦質賴購贈贊
【赤】赤赦【走】走赴起超
越趣【足】足距跡路踊踏
蹟蹴躍【身】身【車】車軌
軍軒軟軸較載輔輕輝輩
輪輸輿轉【辛】辛辨辭辯
【辰】辱農【辵】辶辻迎近
返迫迭述迷追退送逃逆
透逐途通速造逢連週進
逸遂遇遊運過道達違遙
遞遠遣適遭遲遷選遺避
還邊【邑】那邦邪邸郊郎

郡部郵都鄉【酉】酌配酒
酢酬酷酸醉醜醫【釆】釋
【里】里重野量【金】金釜
釘針釣鈍鈴鉛鉢銀銃銅
銘鋭鋒鋼錄錢錦鍋鍛鎌
鎖鎮鏡鑄鐘鐵鑑鑛【長】
長【門】門閉開閏閑間閣
閲關【阜】防附降限陛院
陣除陪陳陰陵陶陷陸陽
隅隆隊階隔隙際障隣隨
險隱【隹】隻雀雄雅集雇
雌雙雜離難【雨】雨雪雲
零雷電需震霜霞霧露靈
【靑】靑靜【非】非【面】面
【革】革靴鞍【音】音響
【頁】頂頃項順須頓預頑
頒領頭頻題額顔願顚類
顧顯【風】風【飛】飛飜
【食】食飢飲飯飾養餓餘
餅館饉【首】首【香】香

【馬】馬馳駁駄駐騎騰騒驅驕驗驚驛【骨】骨髄體
【高】高【髟】髪【鬥】鬪
【鬼】鬼魂魔【魚】魚鮮鯉鯛鰹【鳥】鳥鳩鳴鶴鷄
【鹵】鹽【鹿】鹿麗【麥】麥
【麻】麻【黄】黄【黑】黑默點黨【鼓】鼓【鼠】鼠【鼻】鼻【齊】齊齋【齒】齒齡
【龍】龍【龜】龜

注意

(一)本表にない漢字は假名で書くこと　(二)固有名詞には本表にない文字を用ひても差支ない、たゞし外國(支那を除く)の人名地名は假名書とすること　(三)代名詞、副詞、接續詞、感動詞、助動詞および助詞はなるべく假名で書くこと　(四)外來語は假名で書くこと

(二) 常用略字 (百五十四字、下の小字は字典體)

勧勸　権權　潅灌　歓歡　観觀
沢澤　択擇　訳譯　駅驛　釈釋
変變　恋戀　蛮蠻　湾灣　茎莖
径徑　経經　軽輕　併併　塀塀
瓶甁　餅餅　研研　斉齊　斎齋
済濟　剤劑　残殘　浅淺　賤賤
銭錢　労勞　営營　栄榮　学學
覚覺　挙擧　誉譽　断斷　継繼
歯齒　齢齡　湿濕　顕顯　窓窗
総總　属屬　嘱囑　為爲　偽僞
帯帶　滞滯　参參　惨慘　両兩
満滿　発發　廃廢　鼠鼠　猟獵
乱亂　辞辭　潜潛　賛贊　走走
徒徒　従從　縦縱　悩惱　脳腦
処處　拠據　担擔　胆膽　来來
麦麥　寿壽　鋳鑄　数數　楼樓
楽樂　薬藥　読讀　続續　竜龍
滝瀧　随隨　髄髓　庶鹿　麗麗
号號　証證　豊豐　弁辯　遥遥
聴聽　廰廳　虚虚　戯戯　遅遲
辺邊　医醫　鉄鐵　関關　双雙
解解　独獨　触觸　畳疊　摂攝
虫蟲　蚕蠶　仮假　児兒　刻刻
励勵　営營　国國　囲圍　円圓
図圖　壱壹　実實　写寫　宝寶
扣控　叙敍　条條　様樣　帰歸
気氣　炉爐　犠犧　献獻　画畫
当當　尽盡　礼禮　称稱　糸絲
欠缺　声聲　台臺　旧舊　万萬
号號　証證　豊豐　弁辯　遥遥
辺邊　医醫　鉄鐵　関關　双雙
霊靈　余餘　館館　体體　闘鬪
塩鹽　点點　党黨　亀龜

大正十三年二月一日印刷
大正十三年二月五日發行

現代實業國語讀本　十四年度囑時定價
卷一—六　定價金四拾四錢　金七拾九錢
卷七—十　定價金參拾九錢　金七拾錢

著作者　八波則吉
東京市小石川區小日向水道町八十四番地
發行者　株式會社東京開成館　代表者　渡邊良助
大阪市西區阿波座二番町一番地
印刷所　日本印刷製本株式會社
東京市小石川區小日向水道町八十四番地
發行所　株式會社東京開成館
〔振替貯金口座〕東京第五參貳貳番
大阪市東區北久寶寺町心齋橋通角
西部販賣所　三木佐助
東京市日本橋區數寄屋町九番地
東部販賣所　林平次郎

著作權所有

東京開成館

広島大学図書
2000045716

庫
24
716